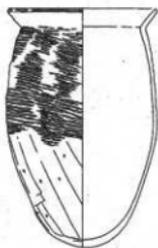


雲仙市文化財調査報告書 第8集

i ko
伊古遺跡 III

弥生時代～中世編

—古江地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告—



2010

長崎県雲仙市教育委員会

発行にあたって

このたび平成17年度から平成20年度まで実施しました古江地区圃場整備事業に伴う伊古遺跡の発掘調査の報告書を発行することになりました。当市は平成17年10月11日（10に11日）に7ヶ町（国見町・瑞穂町・吾妻町・愛野町・千々石町・小浜町・南串山町）が合併して誕生し、「豊かな大地・輝く海とふれあう人々で築くたくましい郷土」の実現を目指しています。

伊古遺跡は、高原半島の北側に位置し、標高約20mの扇状地台地上の水田地帯に広がります。西側には西郷川が流れ、遺跡東端は雲仙普賢岳の麓から舌状の丘陵が続きます。遺跡の南側には雲仙普賢岳がそびえ、頂上付近には平成新山と名付けられた溶岩ドームが噴火の生々しさを今に伝えています。北側に目を移せば、眼下に有明海が広がり、佐賀県・福岡県・熊本県までも一望することができます。

これまでも調査内容を報告（2008・2009雲仙市教委）しておりますが、当遺跡からは、縄文時代から中世までの幅広い時代の遺物・遺構が発見されており、その埋蔵量は計り知れないほどです。昨年報告いたしました、1,500点を超える縄文時代草創期の土器や細石器の検出は、県内でも有数の資料であり、旧石器時代から縄文時代へと移り変わる人々の生活の様子を勢豊させます。

今報告では、遺跡より検出された弥生時代から中世における遺構・遺物を報告します。弥生時代の甕棺墓群や環濠と考えられる堀の跡、熊本地方からもたらされたと考えられる土器群、中世の輸入陶磁器類や瓦器・土師器類及び滑石製製品など、数多くの資料が発見されております。特に、古墳時代初頭と考えられる土器群は、熊本地方で作製されたものと考えられ、県内では初めての発見となりました。有明海を越えて人と文化の交流が存在していた証であり、当地に暮らした祖先たちの姿を垣間見ることができます。また、中世における大量の中国製輸入陶磁器類の発見は、これもまた、県内でも有数の規模で、当時の交易史を考えるうえでまたとない貴重なものとなりました。どの時代においても、当遺跡地が地域社会の中心として機能していたと考えられ、有明海沿岸の歴史・文化を考える上で「鍵」となる遺跡となるでしょう。

雲仙市の緑豊かな農業地帯も、近年の農業基盤整備に伴い大きく変貌しております。このような情勢の中で、祖先の貴重な文化遺産を保護し、これを後世に伝えることは、私たちに課せられた重要な責務であります。本市では、このような事態に対処するため、遺跡発掘調査を行い保存・保護に努めて参りました。そして調査の成果を公開する一つの手立てとして報告書を作成いたしました。遺跡の宝庫といわれる本市にとりましては、貴重な歴史と文化を理解するうえで大きな役割を果たすものと期待しております。

最後になりましたが、今回の調査に当たり、地元地権者の皆様、工事関係者の皆様、大学・博物館関係の諸先生方ならびに長崎県教育委員会学芸文化課の皆様のご指導に衷心から感謝申し上げます。

平成22年3月25日

雲仙市教育委員会
教育長 塩田 貞祐

例

1. 本報告は平成17年度～平成20年度（2005年～2008年）に実施した古江地区県営団地整備事業に伴う長崎県雲仙市瑞穂町に所在する伊古遺跡の発掘調査の報告である。
2. 調査は旧瑞穂町教育委員会及び雲仙市教育委員会が担当した。現地調査は下記の期間実施した。
2005年8月17日～2008年10月10日

3. 調査体制は次のとおりである。

瑞穂町教育委員会（2005/4/1～2005/10/10）

教 育 長	小峰 辰雄
教 育 次 長	小田 雅夫
係 長	内田 啓介
主 査	宮崎 博久

調査担当

文化財調査員	安樂 哲史
--------	-------

雲仙市教育委員会（2005/10/11～2007/3/31）

教 育 長	鈴山 勝利
教 育 次 長	辻 政実
生涯学習課長	岩永 判二
文化財班班長	柴崎 孝光
主 査	辻田 直人
主 事	徳永 真幸

調査担当

主 査	江崎 亮太
文化財調査員	安樂 哲史（～2006/3/31）
文化財調査員	山下 美郷・益田 豊明 （2006/4/1～）

平成20年度調査体制

教 育 長	鈴山 勝利（～12/1）
教 育 長	塩田 貞祐（3/1～）
教 育 次 長	塩田 貞祐（～2/28）
教 育 次 長	山野 義一（3/1～）
生涯学習課長	川鍋 嘉則
課 長 補 佐	金子 悦治
文化財班班長	田中 卓郎
文化財班係長	江崎 亮太
主 事	徳永 真幸

調査担当

主 査	辻田 直人
文化財調査員	山下 美郷・小野 綾夏・ 大野 瑞恵
文化財整理員	早稲田一美・柳原亜矢子・ 林田 崇

平成21年度調査体制

教 育 長	塩田 貞祐
教 育 次 長	山野 義一
生涯学習課長	川鍋 嘉則
課 長 補 佐	金子 悦治
文化財班班長	田中 卓郎
文化財班参事補	江崎 亮太

言

係 長	辻田 直人
主 査	徳永 真幸
文化財調査員	小野 綾夏・大野 瑞恵・ 村子 晴奈
文化財整理員	早稲田一美・柳原亜矢子・ 小笹 智枝

4. 現地での遺構・遺物の実測は進藤涼子・前田チイ・吉川 新・水谷安孝・東 文子・竹田将仁（別府大学）・江崎・安樂・山下・益田が行い、遺物の実測は辻田・小野・大野・村子・早稲田・柳原・小笹が、トレースは早稲田が行った。また、図版の編集・作成は辻田・小野・大野・村子・早稲田・柳原が行い、写真は現地調査を江崎・安樂・山下・益田・辻田・小野・大野が撮影した。掲載遺物写真は小野・早稲田・柳原が行い、写真編集は小野が行った。
5. 現地での遺構実測の一部は御理蔵文化財サポートシステム長崎支店、及び、佛扇精光に委託した。出土遺物実測の一部は御理蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した。
6. 空中写真撮影業務は九州文化財研究所及びび宿スカイサーバイ九州に委託した。
7. 本遺跡の遺物及び写真・図面等は雲仙市国見神代小路歴史文化公園 歴史民俗資料館で保管している。
8. 本書で用いた方位はすべて真北であり、国土座標は世界測地系による。
9. 現地調査および本書の刊行にあたり多くの方々からご助言いただいた、記して謝意を表します。長岡信治（長崎大学教育学部教授）、木本雅康（長崎外国語大学）、早田 勉（隼火山灰考古学研究所）、川道 寛（長崎県教育委員会）、渡邊康行、杉原敏之（福岡県教育委員会）、本田秀樹（長崎県立北高等学校）、山口勝也（御理蔵文化財サポートシステム）、竹中哲朗（諫早市教育委員会）、平田賢明、長崎県学芸文化課、長崎県鳥原振興局農村整備課、西郷土地改良区、雲仙市農漁村整備課、長崎県考古学会、瑞穂史談会、御理蔵建設、御順宝建設、御富士建設（順不同）
10. 本書の執筆は辻田・小野・大野・村子が分担し、各章及び各節文末に執筆者名を記した。
11. 本書の編集は江崎の協力を得、辻田・小野・大野・村子による。

目 次

巻頭図版

発行にあたって

例言

本文目次

挿図目次

表目次

図版目次

第1章 調査の経緯 1 p

第1節 発掘調査にいたる経緯 (辻田)

第2節 発掘調査の方法及び経過 (辻田)

第3節 遺跡の地理的・地形的環境 (辻田)

第2章 弥生時代～古墳時代 4 p

第1節 弥生時代 (小野)

第2節 弥生時代終末～古墳時代初頭 (小野)

第3章 中 世 26 p

第1節 検出遺構 (辻田)

第2節 出土遺物 (大野・小野)

第4章 ま と め 74 p

第1節 総括 (小野)

第2節 ま と め (小野・村子)

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図 (1/20,000)	
第2図	調査区配置図 (1/1,775)	3
第3図	F区甕棺・ミニチュア土器出土状況 (甕棺1/12・土器1/6)	4
第4図	3号甕棺検出状況 (1/20)	5
第5図	1号甕棺検出状況 (1/20)	5
第6図	2号甕棺検出状況 (1/20)	5
第7図	F区出土甕棺 (1/6)	7
第8図	F区・F'区出土土器 (1/3)	8
第9図	市道試掘調査甕棺出土状況 (1/20)	8
第10図	市道出土甕棺 (1/6)	9
第11図	ウッドサークル検出地点 (H・Q4・R区) (1/400)	10
第12図	H・Q4区ウッドサークル検出状況 (1/200)	11
第13図	H区ウッドサークル出土遺物 (1/3)	13
第14図	H区出土土器 (長頸壺) (1/3)	14
第15図	H区出土土器 (器台) (1/3)	14
第16図	伊古遺跡 I・J区 (1/400)	16
第17図	J区SX-01甕棺出土状況 (1/20)	17
第18図	J区SX-02甕出土状況 (1/20)	17
第19図	J区SX-01・SX-02出土土器 (甕棺・甕) (1/6)	17
第20図	Q区SD-1・Q・R区SD-3検出状況 (1/400) Q区SD-1土器検出状況 (1/100)	19
第21図	Q区出土土器 (甕) (1/3)	21
第22図	Q区SD-1出土土器 (甕・壺) (1/3)	22
第23図	Q区SD-1出土土器 (鉢・高坏) (1/3)	23
第24図	Q区SD-1出土土器 (高坏) (1/3)	23
第25図	Q区SD-3出土土器 (甕) (1/3)	24
第26図	Q区土坑出土土器 (鉢) (1/3)	24
第27図	D3区出土土器 (1/3)	25
第28図	JT-1出土土器 (甕) (1/3)	25
第29図	S区掘立柱建物検出状況 (1/100)	27
第30図	S区1号掘立柱建物 (1/50)	28
第31図	S区2号掘立柱建物 (1/50)	29
第32図	S区3号掘立柱建物 (1/50)	30
第33図	C区土坑墓検出状況 (1/50・拡大図1/25・遺物1/6)	31

第34圖	H區土坑群檢出狀況 (1/100·土坑断面1/50·出土遺物1/6)	33
第35圖	H區土坑群出土遺物 (1/3)	33
第36圖	龍泉窯系青磁① (1/3)	35
第37圖	龍泉窯系青磁② (1/3)	37
第38圖	龍泉窯系青磁③ (1/3)	39
第39圖	龍泉窯系青磁④ (1/3)	41
第40圖	龍泉窯系青磁⑤ (1/3)	42
第41圖	同安窯系青磁① (1/3)	44
第42圖	同安窯系青磁② (1/3)	46
第43圖	同安窯系青磁③ (1/3)	48
第44圖	同安窯系青磁④ (1/3)	50
第45圖	同安窯系青磁⑤ (1/3)	51
第46圖	高麗青磁 (1/3)	51
第47圖	白磁① (1/3)	53
第48圖	白磁② (1/3)	55
第49圖	白磁③ (1/3)	57
第50圖	白磁④ (1/3)	59
第51圖	白磁⑤ (1/3)	61
第52圖	白磁⑥ (1/3)	63
第53圖	青白磁 (1/3)	64
第54圖	土師質土器 (1/3)	65
第55圖	瓦器① (1/3)	67
第56圖	瓦器② (1/3)	69
第57圖	瓦器③ (1/3)	71
第58圖	瓦器④ (1/3)	73

表 目 次

第1表	S區檢出掘立柱建物群構成表	30
第2表	出土土器觀察表	77
第3表	出土土器觀察表	78
第4表	出土土器觀察表	79
第5表	出土土器觀察表	80
第6表	中世土坑墓遺物一覽表	80
第7表	中世遺物一覽表 (貿易陶磁器·青磁①)	81

第8表	中世遺物一覧表 (貿易陶磁器・青磁②)	82
第9表	中世遺物一覧表 (貿易陶磁器・白磁①)	83
第10表	中世遺物一覧表 (貿易陶磁器・白磁②)	84
第11表	中世遺物一覧表 (貿易陶磁器・白磁③)	85
第12表	中世遺物一覧表 (貿易陶磁器・青白磁)	85
第13表	中世遺物一覧表 (土師質土器)	85
第14表	中世遺物一覧表 (瓦器①)	86
第15表	中世遺物一覧表 (瓦器②)	87

図版目次

中表紙図版	遺跡上空より有明海を望む (中央に流れる西郷川)
巻頭図版①	遺跡上空写真 (圃場整備事業の進む伊古遺跡・平成20年)
巻頭図版②	遺跡上空写真 (D6区)
巻頭図版③	遺跡上空写真 (E区・道路状遺構) (上) 道路状遺構 (北半分) (左下) 道路状遺構 (南半分) (右下)
巻頭図版④	遺跡上空写真 (H区・ウッドサークル・中世土坑群・後ろは雲仙普賢岳) (上) H区ウッドサークル (左下) H区土坑群 (右下)
巻頭図版⑤	遺跡上空写真 (J区・後ろは雲仙普賢岳)

図版1

遺跡上空写真 (昭和38年国土地理院)

図版2

F区3号甕棺検出状況 (北側より)
F区1号甕棺検出状況 (北側より)
F区2号甕棺検出状況 (東側より)
市道・SK-7甕棺検出状況 (北側より)
H区ウッドサークル検出状況 (北側より)
ウッドサークル内小ピット検出状況
H区全景 (北側より)
ウッドサークル検出作業風景

図版3

Q4区ウッドサークル検出状況 (北側より)
R区ウッドサークル検出状況 (北側より)
I区SD-1検出状況 (北側より)
SD-1土層 (南側より)
J区SX-01甕棺検出状況 (北側より)
J区SX-02甕棺検出状況 (東側より)
Q区全景 (西側より)
Q区SD-1検出状況 (東側より)

図版 4

- Q区SD-1 検出状況近景 (東側より)
Q区SD-1 遺物出土状況 (北側より)
Q区SD-1 遺物出土状況近景 (西側より)
Q区SD-1 土層 (北側より)
Q区R区SD-3 検出状況 (南東側より)
Q区R区SD-3 土層 (北側より)
JT-1 全景 (南側より)
JT-1 甕出土状況 (東側より)

図版 5

- S区掘立柱建物1号2号検出状況 (北側より)
S区掘立柱建物3号検出状況 (北側より)
S区掘立柱建物群全景 (南東側より)
S区掘立柱建物群SP-93検出状況 (西側より)
H区中世土坑墓群 (北側より)
H区SK-5 検出状況
H区SK-36検出状況
H区中世土坑墓群検出風景 (南側より)

図版 6

- F区・市道出土甕棺 (7頁第7図、9頁第10図)

図版 7

- F区・F'区・H区出土土器 (8頁第8図、13頁第13図、14頁第14・15図)

図版 8

- J区・Q区出土土器 (17頁第19図、21頁第21図、22頁第22図、23頁第23図)

図版 9

- Q区・D3区・JT-1・H区出土土器 (23頁第23・24図、24頁第25・26図、25頁第27・28図、33頁第35図)

図版10

- 龍泉窯系青磁 (35頁第36図~42頁第40図)

図版11

- 同安窯系青磁 (44頁第41図~51頁第45図)

図版12

- 高麗青磁・白磁① (51頁第46図~59頁第50図)

図版13

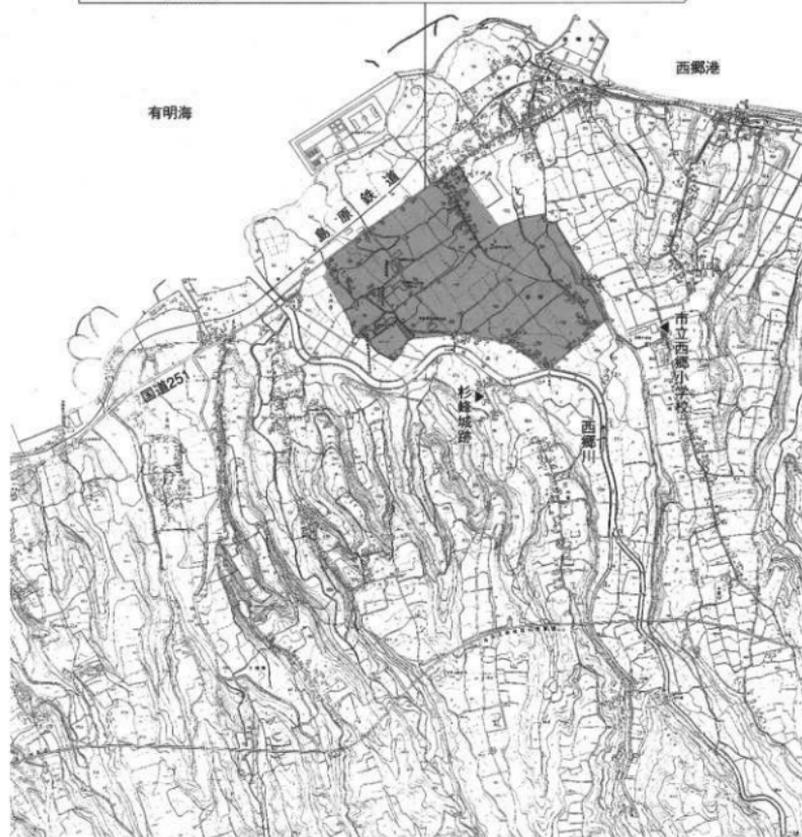
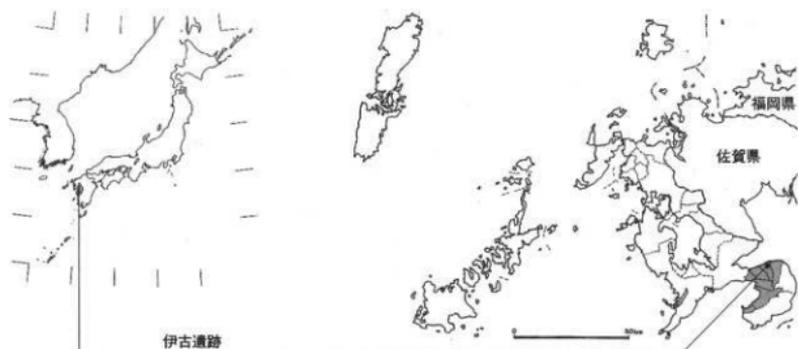
- 白磁②・青白磁 (59頁第50図~64頁第53図)

図版14

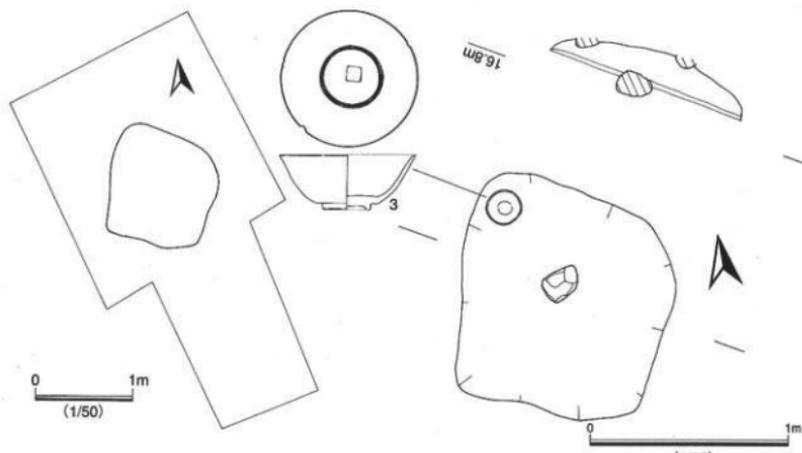
- 土師質土器 (小皿) (65頁第54図)
瓦器① (67頁第55図~69頁第56図)

図版15

- 瓦器② (69頁第56図~73頁第58図)



第1図 遺跡位置図 (1/20,000)



第33図 C区土坑墓検出状況（1/50・拡大図1/25・遺物1/6）

一土坑墓一

試掘調査時にC区より土坑墓が1基検出されている。C区は遺跡東端、雲仙普賢岳より延びる舌状丘陵の崖下直下で、丘陵上面との比高差は2mを測る。また、土坑墓の検出されたC区と遺跡本体の平坦面との比高差は2mを測る。C区は水田として活用されており、丘陵に沿った幅の狭い圃場であり、当然のことながら水平に整地されている。したがって、丘陵上面から階段状に2m下のC区、さらに2m下がって遺跡本体の平坦面となる。いずれの場所も水田として平坦に整地されており、旧地形の様子は判然としなが、古代以降の土地利用の中で削平と造成を繰り返してきたものと考えられる。ちなみに、第29図の土坑墓検出時の柄鏡状の調査区範囲は試掘調査時のもので、本調査では圃場全体を調査しているが、他に検出は見られなかった。

水田耕作土及び床土を除去するとすぐに遺構検出面となる。検出された土坑墓は、1辺1.1mの歪な正方形である。深さは20cm程しかないため、かなり上部が削平されているようである。土坑墓の断面形状を見ると底面はレンズ状の落ち込みとなっており、地山に含まれている礫が顔を出している。検出時に中央部分から人頭大の礫が底面から20cmほど浮いた部分で検出されている。遺構検出とほぼ同時に検出されており、土坑に伴うものかどうかやや怪しい感もあるが、土坑内にもともとあったものと考えている。土坑内からは龍泉窯系青磁碗の完形品が1点検出されている（35頁・3）。土坑の北側隅で底面近くに据えられたように検出され、碗の口縁部が遺構検出の際の掘具にからうじて引っかからない状況であった。同様な遺構は松浦市の楼椈田遺跡（安楽・中田1985）で検出されている。楼椈田遺跡5号集石土坑では、龍泉窯系連弁文青磁碗の完形品とともに、鉄釘状の遺物も検出されており、本来は木棺墓の可能性もある。また、土坑内に人頭大礫が埋土中に入っていることも共通する。この礫は、本来木棺墓上部に積んであったものが木棺の腐食崩落により土坑内に入り込んだものと考えられ、南島原市北有馬町今福遺跡（町田・宮崎1986）や雲仙市国見町矢房遺跡（辻田・竹中2003）・同市同町猪ノ瀬遺跡（辻田・竹中2003）などでも同様の中世木棺墓と考えられる土坑が検出されている。伊古遺跡C区の土坑も、底面に据えられたように検出された青磁碗や、底面から浮いた礫の検出など、中世木棺墓と考えられる土坑と共通点が多い。今回検出された土坑墓も本来は木棺墓の可能性があろう。また、楼椈田遺跡では長方形の土坑の北側隅に据えられたように青磁碗が検出されており、伊古遺跡のものと同通する。

試掘調査時に無作為に設定した試掘場で、県内2例目(1例目は樓槽田遺跡)となる完形青磁碗の検出が見られたため、本調査時には検出された圃場及び隣接する圃場についても調査を行った。しかしながら同様の遺構は検出されなかった。図面から分かるとおり土坑の深さは20cm程しかなく、かなりの部分が削平されており、他の土坑が消滅している可能性もある。しかしながら樓槽田遺跡や今福遺跡においても、木棺墓と考えられる土坑については比較的単独で検出されており、伊古遺跡の例も同様と考えられる。前述したが、C区は遺跡東端の丘陵崖下の狭小な平坦面で検出されており、遺跡本体の平坦面から2mほど上位にある。かなり削平されているため、木棺墓埋設当時の地表面は遺跡本体の平坦面から3m以上上位で、往時は集落を見下ろす丘陵崖面中位にあたと場所と考えられる。(辻田)

【参考文献】

- 安楽 勉・中田敦之 1985『樓槽田遺跡』長崎県文化財調査報告書 第76集 長崎県教育委員会
辻田直人・竹中哲朗 2003『石原遺跡・矢房遺跡』国見町文化財調査報告書(概報)第3集 長崎県国見町教育委員会
町田利幸・宮崎貴夫 1986『今福遺跡』Ⅲ 長崎県文化財調査報告書 第84集 長崎県教育委員会

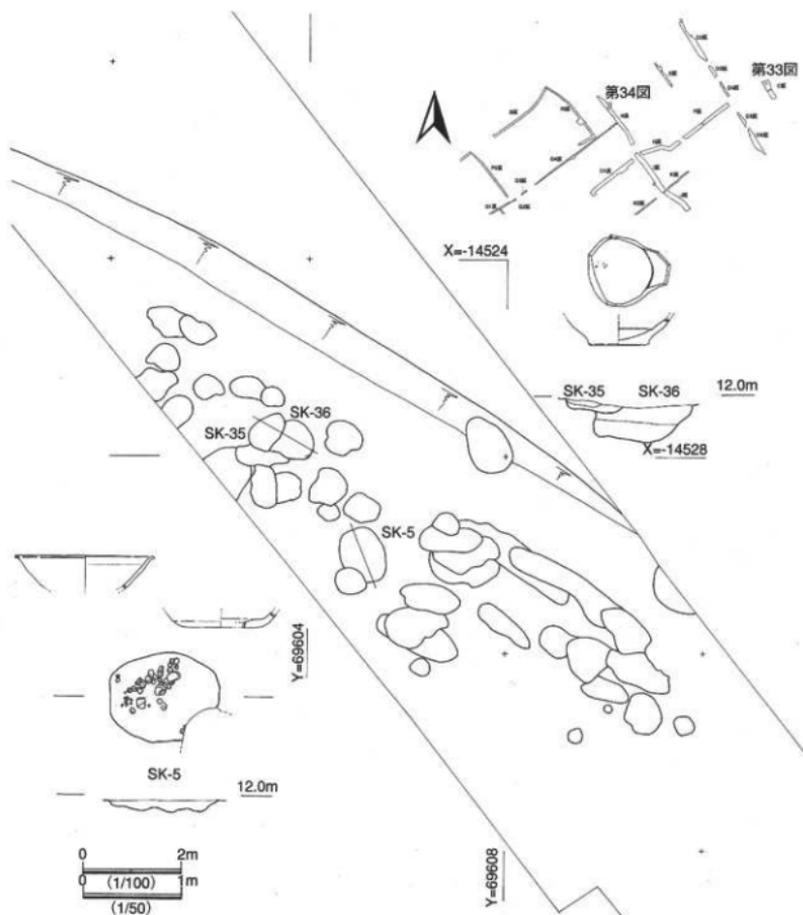
一土坑群一

H区より中世の土坑群が検出されている。大きさや形は不統一で、深さもまちまちである。切り合い関係は多いが埋土の土質が非常に酷似しており、前後関係を判断するのに苦労した。出土遺物は細片ばかりで実測に耐えるものは掲載分ぐらいであるが、後述する中世遺物群と大きく時期は違わない。ここでは2基の土坑について個別に報告する。SK-36は比較的深さのある土坑で径1mほどの不定形を呈す。検出面付近の埋土から第31図の白磁碗底部片が検出されている。内部の土層は層厚40cm程で2層に分かれ、上層は暗褐色粘質土層で締まりは良いがやややわらかい。上部から白磁碗底部片が検出されている。下層は同じく暗褐色粘質土層であり上層より締まっている。SK-5は深さ10cm程の楕円形の土坑で、白磁片及び土師皿片が1点ずつ検出されている。内部の土層は褐色粘質土層で締まりは良いがやややわらかい。拳大の礫が20数点含まれている。その他のものもいずれも同様に浅い土坑で、拳大程の礫が含まれるものもある。遺構検出面は基盤となる黄褐色粘質土で、かなり上部が削平されていることが予想される。

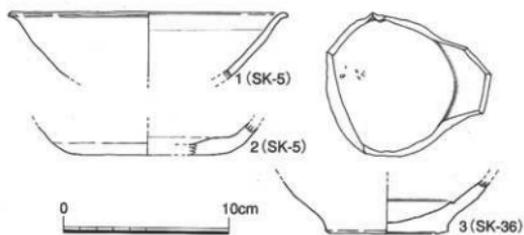
検出された土坑群は内部の土層の状態がいずれも同様で、近い時期に作られたことが予想される。時間的には前述の木棺墓や掘立柱建物群と同じで、伊古遺跡の中世集落を構成する遺構の一部であると考えられる。内部の土層の対比や出土物から土坑墓群と考えられるであろうか。とすると、完形品の龍泉窯系青磁碗を副葬するC区の木棺墓とは様相が大きく異なる。墓域の選定や規模、墓の構造・形態等、C区のを上流階級層、H区のを庶民層のもの、と区分できそうな状況を示している。しかしながらC区のものは「墓」と考えて問題ないと考えられるが、H区の土坑群については明確に「墓」として断定ができない以上、想定範囲を出ない。(辻田)

一出土遺物一

1は白磁碗の破片で底部は欠損する。無文で、やや厚めの灰白色の釉薬がかかる。復元径は16.8cmを測る。2は土師器坏片で底部から胴部にかけての破片である。底面は糸切り離しで、内外面ともに回転を利用した横位のナデを行っている。胎土には角閃石を多く含み、在地での焼成が予想される。3は白磁碗底部で、1とは個体が異なる。底径は7.35cmを測り、胴部から口縁部にかけては欠損する。内面には灰白色の釉薬を施軸し、轆轤成形された回転方向の跡がうっすらと浮き出る。外面の残存部分には施軸は見られない。底部の高台は幅広で、高台内部の成形は粗く、凹凸があり高台畳付部分と底部中央の高さはほとんど変わらない。胎土も粗くまた、釉薬の発色もやや悪い。器壁も厚ぼったく、1に比べると粗い作りの白磁碗と考えられる。(辻田)



第34图 H区土坑群検出状況 (1/100・土坑断面1/50・出土遺物1/6)



第35图 H区土坑群出土遺物 (1/3)

第2節 出土遺物

一青磁一(第36図～第46図)

中国産では図示しただけでも龍泉窯系56点、同安窯系53点、朝鮮産では初期高麗青磁1点が出土している。今回は主にD区から出土したものを取り上げる。龍泉窯系と同安窯系の資料では概報『伊古遺跡(中世編)2008』(以下概報)で報告したのも分類し、改めて報告する。

龍泉窯系(第36図～第40図)

碗(第36図1～第39図47)

I類(第36図～第38図)

丸く肉厚な口縁端部は直口縁か若干外反し、体部下位の腰が張り、重心が重い。高台は断面四角で底部は厚い。高台畳付と高台内は露胎である。内外面無文あるいは内面に文字印文があるものと、いわゆる劃花文と呼ばれる片影蓮華文を施した劃花文碗等がある。

I-1 a類(第36図1) 体部内外面が無文のもの。1は口縁部が若干内湾気味の直口縁で、釉薬は口縁部付近に厚くかかり液垂れしている。

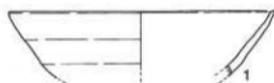
I-1 類(第36図2) 口縁部内面もしくは、底部内面中央の一部に文様をもつもの。2は口縁部が丸く肉厚で若干外反する。口縁部内面に片影蓮華文を施している。釉薬はやや厚くかかる。

I-1 c類(第36図3・4) 体部内外面は無文だが、見込み内面に文字印文があるもの。3は概報で報告したものである。C区の中世土坑墓から出土したもので、出土地区はD区から出土した他の遺物とは異なる。口径16.4cm、底径5.85cm、器高6.75cm。口縁部は外反する。口縁端部と全体的な器内は薄く、高台内は平坦である。内外面は無文で、内面見込みは文字印文が施される。印字は実測不可能であったが、文字の一部から「金玉満堂」の可能性が高い。釉薬は高台外面までかかる。完形品。高台内には高台重ね焼きの目跡が残る。4は直口縁で、ヨコナデしているため口縁部は薄い、体部下は厚い。青白磁調の明オリブ色釉薬が厚くかかり、目の粗い貫入がある。

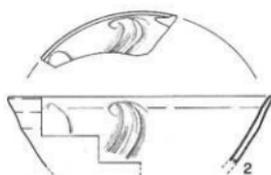
I-2類(第36図5～第37図18) 体部内面と内面見込みに片影蓮華文を施しているもの。体部外面は無文。

I-2 a類(第36図5・6) 内面見込みに3単位の花文を施しているもの。5は高台が完全に残る。高台内は平坦である。釉薬には少量の混入物があり、高台外面までかかるが、部分的に畳付や高台内まで及んでいる。6は高台が完全に残る。高台内の削り出しはやや粗く、高台との境に削り残しがある。底部片のため体部内面の文様は不明だが、内面見込みに簡略化された片影蓮華文が施されるため、I-2 a類であると考えられる。釉薬は高台外面までであるが、部分的に畳付や高台内まで及んでいる。

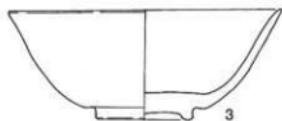
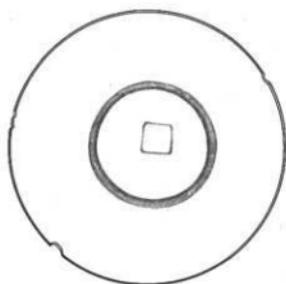
I-2 a'類(第36図7～9) 内面見込みの花文が2単位施されているもの。7・8は概報で報告したものである。7は復元口径16.4cm、底径6.4cm、器高6.3cm。口縁部は外反し、内面には沈線による圏線がめぐる。釉薬は高台外面までかかるが、部分的に畳付や高台内にも及んでいる。内外面に大きなヒビ状の貫入が入る。約1/3残存。8は復元口径16.4cm、底径6.05cm、器高6.85cm。口縁部は外反し、内面には沈線による圏線がめぐる。花文は2単位だと考えられ、一筆書きで施されている。釉薬には目の粗い貫入が入る。釉薬は高台外面までかかるが、部分的に畳付や高台内にも及んでいる。約3/4残存。9は口縁部がわずかに外反し、体部は薄くつくる。内面にはやや低い位置に沈線の圏線がめぐる。釉薬には少量の混入物があり、口縁部付近には目の粗い貫入が入る。



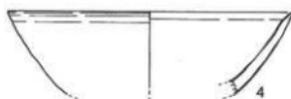
I-1a類



I-1類

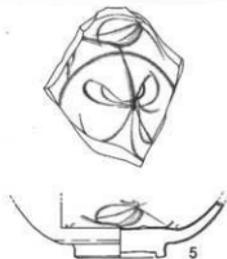


3



4

I-1c類



5

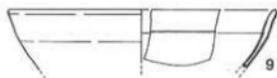


6

I-2a類



7



9



8

I-2a'類

第36圖 龍泉窯系青磁① (1/3)

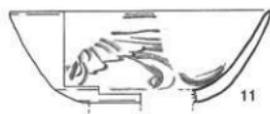


I-2b類(第37図10・11) 碗I-2a、I-2a'類の見込みに施された花文に、横から見た葉文を加えたもの。体部外面は無文である。10は高台の削り出しが浅く、重心が重い。体部下位は大きく腰が張っている。底部内面は圏線が二重にめぐり、内面見込みには、単位は不明だが花文と葉文が施されている。釉薬は高台外面までかかるが、部分的に畳付や高台内にも及んでいる。全体的に丁寧な仕上げである。約1/2残存。11は復元口径15.75cm。これは底部を欠損しているため、高台際の径から復元した数値である。口縁部は直口縁で、口唇部が薄くなる。内面には沈線による圏線がめぐり、内面見込みには、単位は不明だが花文と葉文が施されている。釉薬は高台外面までかかっていたと考えられる。内外面にヒビ状の貫入と、体部外面上位は目の細かい貫入が入る。約1/3残存。

I-2類(第37図12~18) 小片であるため詳細が不明なものや、文様に類似例がみられず細分できなかったもの。12は復元口径15.45cm、底径5.4cm、器高6.5cm。完形に復元できた。口縁部は直口縁で高台内の中心部はやや丸く盛り上がる。底部内面の径は小さい。内面見込みに花文が2単位施されるが、上位に圏線はみられない。内外面の釉薬は所々擦れて胎土が見えている部分がある。オリブ灰色の釉薬は高台際までかけられている。接合できなかったが同一個体と考えられる破片が6点ある。約1/3残存。13は口縁部片で、口縁部は基本的に直口縁であるが、口縁端部はわずかに外反する。薄くつくり丸くおさめる。内面見込みに沈線による圏線と花文が施されている。文様の掘り込みは浅めで、若干淡い印象を受ける。釉薬の表面には微量の気泡が確認できる。文様の特徴から、花文が2単位のI-2a'類である可能性がある。14は体部上位で口縁部がやや外反する。口縁端部は薄くつくり丸くおさめる。腰の張りは弱い。内面見込みに花文の一部が施されている。花文の特徴はI-2類とほぼ一致すると考えられる。釉薬には口縁部付近に目の粗い貫入が入る。15は口縁部が体部上位でわずかに外反する。体部下位から口縁部にかけて、器肉が薄くなり、口縁端部は丸くおさめる。内面見込みに花文の一部と、浅い沈線による二重圏線が施されている。釉薬には微量の混入物と、ヒビ状の貫入が入る。16は底部が完全に残存する。底部外面は平坦で、中心部は丸く小さいくぼみがある。底部内面には成形時の指ナデによるうず巻き痕跡が残る。目の細かい貫入の入ったオリブ灰色の釉薬は高台外面までかかるが、部分的に畳付や底部外面にも及ぶ。底部外面の釉薬がかかる部分には重ね焼き時の目跡が付着し、底部内面には目跡を剥がしたと考えられる痕跡がかすかに5ヶ所残る。内面見込みは花文の一部が、底部内面には圏線が確認できる。断面四角の高台を持ち、高台の削り出しは浅い。体部下位は腰が張り、重心が重い。この特徴から、I-2類であると考えられる。17は内面見込みと底部内面に、花文の一部が施されている。高台は断面四角で、削り出しはI類の資料の中では一番浅く、底部外面は平坦である。体部下位でやや腰が張り、重心が重い。内面見込みの段は浅い。黄褐色の釉薬は基本的に高台外面までかかるが、部分的に畳付や底部外面にも及んでいる。内面には目の粗い貫入が入る。胎土は灰白色できめが細かい。底部内面に施された花文が葉文のようであることに加え、胎土と釉薬の特徴から、青磁ではなく陶器のように見える。しかし、内面に花文が施されている点や、底部と体部の断面形によりI-2類であると考えられる。18は内面には花文の一部が施されている。高台は断面四角で、削り出しはやや深めである。高台外面は平坦になる。腰の張りはやや弱く、底部内面の段は浅い。釉薬は基本的に高台外面までかかるが、部分的に畳付や高台内にも及び、内面の釉薬には目の粗い貫入が入る。確認できる内面の文様は一部であるが、底部と体部の断面形からI-2類であると考えられる。



10

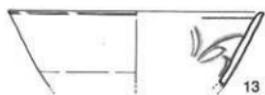


11

I-2b類



12



13



14



15



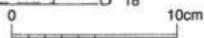
16



17



18



I-2類

第37圖 龍泉窯系青磁② (1/3)

I-4 類 (第38図19~24) 体部内面を縦の分割線で5分割して雲気文や花文を入れ、内面見込みには略化した花文などを片彫りするもの。

I-4 a 類 (第38図19~21) 口縁部に輪花がないもの。19は概報で報告したものである。口径15.7cm、底径5.2cm、器高7.15cm。口縁部は外反する。各文様はほとんど一筆がきである。内面見込みは花文であるが、省略した表現となっている。文様は彫り込みが浅いのか、全体的に薄い。オリーブ灰色の釉薬は基本的に高台外面までかかるが、部分的に畳付や底部外面にも及んでいる。底部外面の釉薬がかかる部分には目跡が2ヶ所残っている。ほぼ完成品。20は口縁部が直口縁で、厚い釉薬がかかる。内面には微量の気泡、外面には目の粗い貫入が入る。21は口縁部が直口縁で、やや厚い釉薬がかかる。内外面には微量の気泡、目の粗い貫入が入る。

I-4 o 類 (第38図22) 口縁部に輪花があり、体部内面に輪花から縦の白堆線を施して分割しているもの。22は口縁部は外反する。破片であるため、白堆線の間に文様があるかは不明である。厚い釉薬がかかり、内外面には目の粗い貫入が入る。

I-2~4 類 (第38図23・24) 体部外面は無文で、内面の文様は花文もしくは飛雲文の一部だと考えられるが、小片で細分できなかったもの。高台や体部の特徴はI類のものと一致する。23は高台~体部が残存する。内面に施された文様の種類は不明である。全面的に厚い釉薬は高台内面までかかる。24は高台~体部が残存する。内面には文様と考えられる横方向の沈線が入る。灰オリーブ、オリーブ灰色の厚い釉薬は基本的に高台外面までかかるが、部分的に畳付までかかる。内外面には目の粗い貫入が入る。

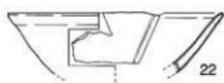
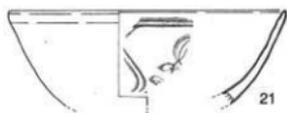
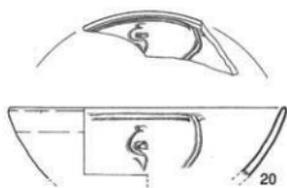
I-6 類 (第38図25) 片彫りの細い花卉の中に、櫛目を縦に入れた花卉を体部外面に一周させているもの。体部内面は片彫り草花文や櫛目文が施されている。

I-6 a 類 (第38図25) 口縁部が直口縁か外反するもの。25は口縁部は直口縁。外面の連弁文は残存部に9本認められ、細長い花卉の中には9~11本の櫛目を入れる。花卉は体部上半に間隔を開けて施され、先端は閉じることがなくわずかに内湾している。体部外面の櫛目文は体部上位だけの部分や下位までの部分と、途中で途切れた形で上位と下位に施されている部分がある。体部内面には草花文が施されている。文様は、彫り込みが浅いため淡い表出になっている。非常に厚く施された釉薬の体部上位には、目の粗い貫入が入る。約1/4残存。

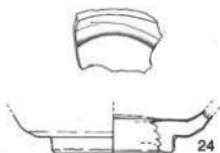
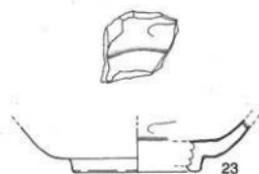
I 類 (第38図26~31) 底部片である。小片のため細分するには至らなかったが、底部の特徴がI類と一致するもの。26は底部内面には成形時の指ナデによるうず巻き痕跡が残り、体部内面下位には櫛描文の一部が施されている。目の細かい貫入の入った釉薬は、体部にはやや厚く、高台には薄く施される。施釉範囲は高台内面までであるが、部分的に底部外面にも及んでいる。底部外面の釉薬がかかる部分と、高台畳付には重ね焼き時の目跡が付着している。27は内面見込みには花文状の文様が片彫りされている。目の細かい貫入の入ったやや厚い釉薬は底部外面にも及んでいる。28は小片で、内外面には文様は確認できない。釉薬は高台畳付まで一部底部外面まで及び、全体的に厚くかかる。29は外面は露胎であるが、内面には釉薬が薄くかかる。30は内外面無文であると考えられる。目の細かい貫入の入った釉薬は、底部外面にも及んでいる。31は細かい貫入が入った薄い釉薬が高台外面上半までかけられている。部分的に高台内面にまで及んでいる。



I-4a類



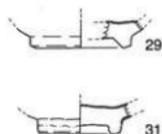
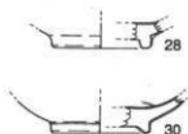
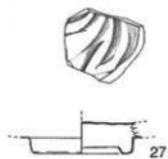
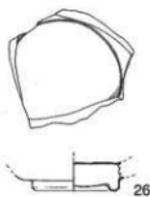
I-4c類



I-2~4類



I-6a類



I類



第38圖 龍泉窯系青磁③ (1/3)

Ⅱ類 (第39図32~45)

体部と高台の形状はⅠ類と同様であるが、体部外面に蓮弁文を有するもの。

Ⅱ-a類 (第39図32~35) 外面に鑄のない片彫り蓮弁文を施すもの。32は直口縁で軸葉は厚く、目の粗い貫入が入る。33は丸く肉厚な直口縁で、外面の片彫り蓮弁文は幅広である。軸葉は厚く細かい貫入が入る。34は基本的に高台際までやや厚く施軸され、貫入が入る。外面は一部褐色を呈する。35は軸葉が厚くかかり内面に目の粗い貫入が入る。施軸範囲は高台外面までだと考えられる。

Ⅱ-b類 (第39図36~37) 体部外面に鑄蓮弁文を施し、内面見込みが無文のもの。36は復元口径16.0cm、底径5.7cm、器高6.9cm。直口縁で、体部外面の鑄蓮弁文は幅の広いものと狭いものが交互に配置され、残存部には7~8枚確認できる。広い蓮弁と狭い蓮弁の境界線が一部不明瞭になり、その中心にはやや不明瞭な鑄がある。蓮弁の間には間弁、内面見込みにには圏線状の沈線。軸葉は基本的に高台外面まで、細かい貫入が入る。約2/3残存。37は軸葉の内外面に細かい貫入が入る。高台外面まで施軸されるが、部分的に疊付にも及ぶ。

Ⅱ-b類かⅡ-c類 (第39図38~43) 底部が欠損しているため、体部外面に鑄蓮弁文を施したa類と、体部外面に鑄蓮弁文を施し見込み内面に印刻があるc類との見分けがつかないもの。38は直口縁。鑄蓮弁とその間に間弁がある。鑄と、中央の蓮弁と間弁の輪郭は不明瞭である。39は直口縁で中央の蓮弁には鑄がある。右側の蓮弁には溶けた軸葉が付着している。これは窯入れの際に他の碗がついたまま焼成され、溶着してしまったものを剥がした痕跡である。本来は焼成後選別されるべきものがそのまま輸入され、消費地である本遺跡で引き剥がされて使用されたことを物語っている。40の口縁部は外反。蓮弁の鑄は不明瞭だが隆起した状態で残り、鑄蓮弁と間弁の輪郭はやや不明瞭。軸葉は厚くかかり目の粗い貫入が入る。41は直口縁で、蓮弁の鑄は不明瞭。軸葉が厚くかかり、外面には目の粗い貫入が入る。42は口縁部が若干外反する。鑄蓮弁の鑄は不明瞭で中心から若干離れた部分にある。残存部には2枚の蓮弁があるが、向かって左側はかなり不明瞭である。軸葉は厚い。43は外面には鑄蓮弁が施されていると考えられる。軸葉は高台疊付まで、目の細かい貫入が入る。

Ⅱ-c類 (第39図44) 体部外面に鑄蓮弁文、見込み内面に印刻があるもの。44は底部内面に草花文を釘彫りし、外面には鑄蓮弁文が施されていたか。軸葉は高台疊付までやや厚く施軸。

Ⅱ類 (第39図45) 45は高台高が低く、底部が肉厚である。内面見込みは無文で体部外面は鑄蓮弁文を施す。高台内には目跡が残る。軸葉は厚く高台外面までかかり、部分的に疊付まで及ぶ。

Ⅲ類 (第39図46・47)

径が小さく、細く尖り気味な高台を持つ。

Ⅲ-1類 (第39図46) 体部外面無文。46は高台が細く高く、底部の器肉は薄い。軸葉は基本的に高台外面までで細かい貫入が入る。高台疊付施軸部分に重ね焼き時のものと考えられる目跡が残る。

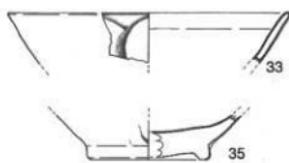
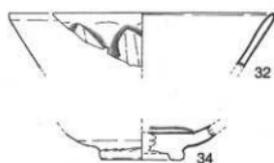
Ⅲ類 (第39図47) 47は高台が高く直立し、高台内は中央が丸く盛り上がる。底部内面は若干窪み、スタンプ文が施される。押しが弱く文様の表出は甘い。目の粗い貫入が入る。全面施軸後高台内の軸を環状に、高台内面上位も圏線状に掻き取る。掻き取られた部分は明褐色を呈する。

小椀 (第39図48・49)

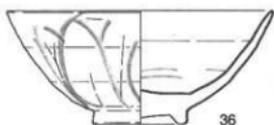
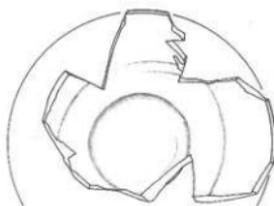
Ⅰ類

Ⅰ-1類 (第39図48) 内外面無文。48は高台内の成形がやや粗く、中心部は丸く盛り上がる。薄い軸葉は高台外面まで、細かい貫入が入る。高台外面は部分的に露胎の部分がある。

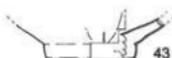
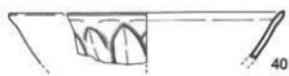
Ⅰ-4類 (第39図49) 体部が他と比べてやや内湾しながら立ち上がる。49は高台の成形がやや粗く、幅が一定ではない。軸葉は体部下位から高台疊付までかかる。



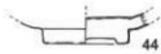
Ⅱ-a類



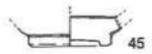
Ⅱ-b類



Ⅱ-b類かⅡ-c類



Ⅱ-c類



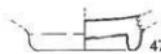
Ⅱ類



Ⅲ-1類



Ⅰ-1類



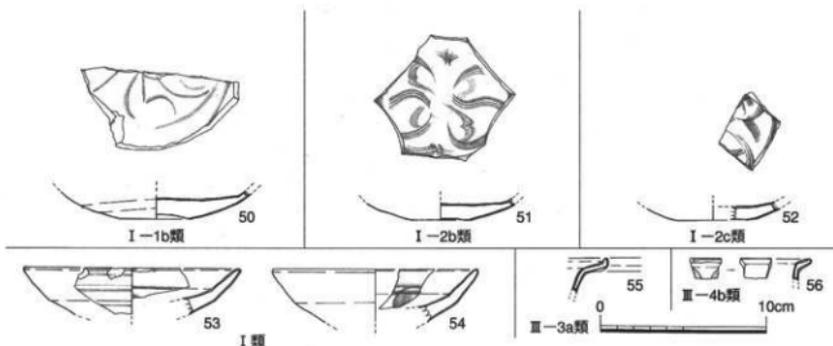
Ⅲ類



Ⅰ-4類



第39圖 龍泉窯系青磁④ (1/3)



第40図 龍泉窯系青磁⑤(1/3)

皿(第40図50~54)

I類(第40図50~54)

体部は中位で屈曲する。口縁部は直に引き出し、口縁端部は丸く細くつくる。

I-1b類(第40図50) 底部外面の釉薬を焼成前に掻き取り、内面見込みにヘラで片彫り花文を施すもの。50は上げ底である。内面見込みの花文は不明瞭である。釉薬の色は内外面ともにムラがあり、外面は浅黄色・明緑灰色、内面はオリブ灰色・浅黄色が混じる。露胎の底部とその断面は橙色を呈す。目の細かい貫入が入り、釉薬と胎土の特徴から、一見陶器のように見える。約1/4残存。

I-2類(第40図51・52) I-1類より小型品で、底部外面の釉薬を焼成前に掻き取るもの。

I-2b類(第40図51) 51の器内は薄い。内面見込みに栴提き花文が施される。露胎の底部にはぶい黄橙色を呈し、釉薬には体部外面中位から上と、体部内面に細かい貫入が入る。約1/2残存。

I-2c類(第40図52) 52は底部が若干上げ底気味で器内は薄い。内面見込みに栴提き花文と細かい栴目が施される。一部軸が剥がれて施文された部分が露出する。釉薬には目の粗い貫入が入る。

I類(第40図53・54) 龍泉窯系だと考えられるが、細分できないもの。53は全体的に器肉が厚い。外面には3条の圏線がめぐり、内面見込みにはずかにな文様が確認できる。明緑灰色の釉薬がやや厚くかかる。54は全体的に器肉が厚く、体部内面中位に段を有する。内面見込みに片彫り花文と栴描き文が施され、釉薬はやや厚くかかる。

坏(第40図55・56)

Ⅲ類

釉調、高台形状等は碗Ⅲ類と同様で、口縁部と体部形状で分類される。

Ⅲ-3a類(第40図55) 55は口縁部片である。横に長く屈折させた口縁部の端部を、さらにつまみ上げている。口縁部の形態から内外面無文であると考えられる。釉薬は全体的に厚くかかり、目の粗い貫入が入る。

Ⅲ-4b類(第40図56) 56は口縁部片である。口縁部は鋭く外反する。外面に鑄蓮弁文の一部が確認できるが、内面見込みに貼付文があるかは不明である。釉薬が厚くかかる。

同安窯系 (第41図～第45図)

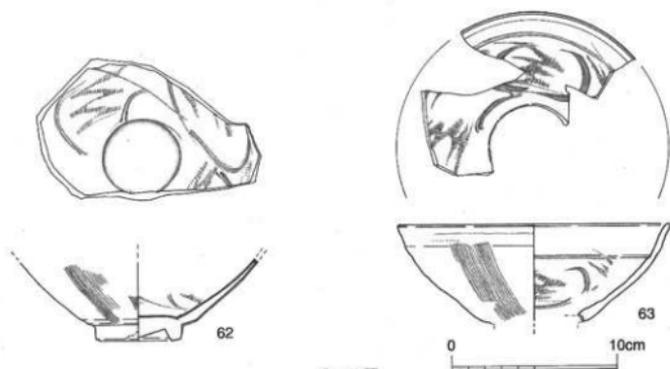
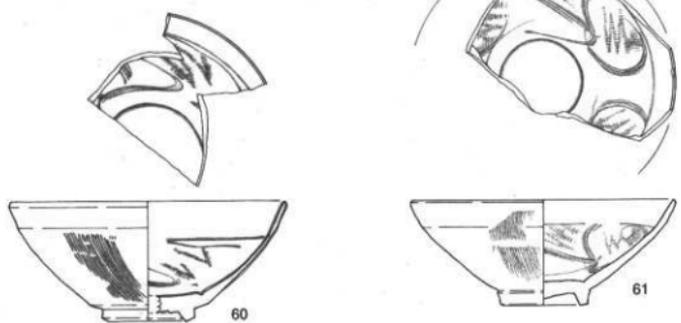
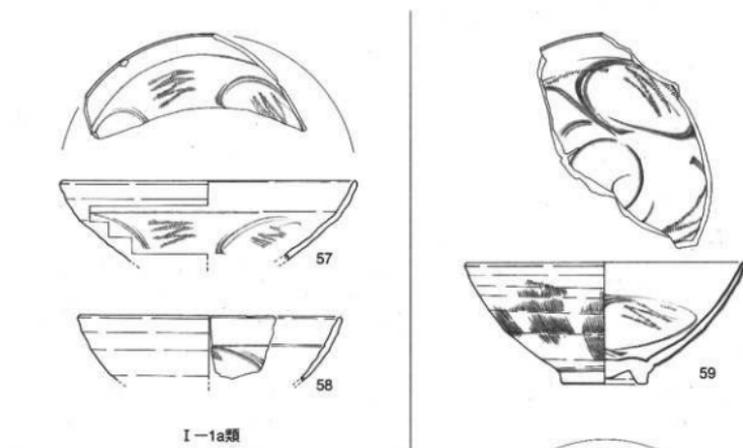
碗 (第41図～第44図)

I類 (第41図～第43図)

I-1類 (第41図57～第43図85) 高台は逆台形。体部は内湾気味に立ち上がり体部上位で内湾する。内面見込みと体部の境は段があり、体部上位には沈線による圏線とめぐらす。体部内面にはヘラ状の施文具で花文、ジグザグの点描文が描かれる。体部外面に施された櫛目文の特徴で細分できる。

I-1 a類 (第41図57・58) 外面無文。57は内面見込みに沈線による圏線、花文、点描文の一部が施されている。文様の掘り込みが浅いことから、圏線と花文の表出が浅い。外面に成形時にできたヨコナデ痕が明瞭に残る。釉薬の表面には気泡が少量あり、薄く均一にかけられている。外面下位まで施釉されていたと考えられる。58は内面見込みに沈線による圏線、花文、点描文の一部が施されている。全体的に文様の掘り込みが浅いことから、表出が浅い。外面は無文であると考えられる。釉薬の表面には気泡が少量あり、ほぼ均一に掛けられているが、口縁部内面は液垂れをしている。

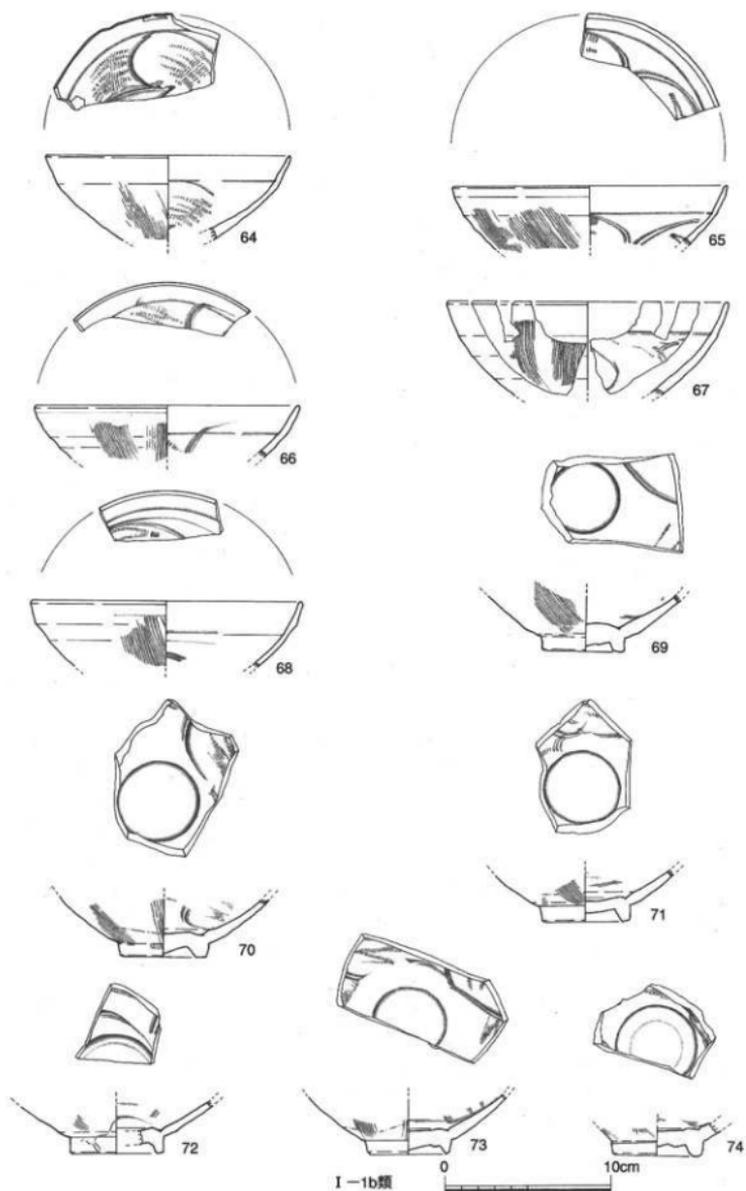
I-1 b類 (第41図59～第42図74) 内面には体部上位に沈線による圏線、中位から下位にヘラ状の施文具で花文、ジグザグの点描文が描かれる。これに加えて体部外面に細かい縦の櫛描文が施されているもの。このうち59・60は概報で報告したものである。59は口径16.5cm、底径5.2cm、器高7.4cm。底部内面と体部との境の段は、他の資料に比べて大きく、底部内面の中心は大きく隆起する。体部外面下位から高台際にかけての調整が粗く、段状に深くえぐれている。口縁部は体部上位で内湾→若干外反する。内面見込みには沈線による圏線、花文、点描文の一部が施されている。文様の表出は、花文の一部は淡いものの、全体的にははっきりしている。上位の圏線は一周せず途切れている。体部外面の櫛描文は、残存部ではほぼ等間隔に6単位確認できる。体部に整形時の凹凸が残るため、櫛目文が途切れる部分もある。釉薬は基本的に高台際までかかるが、一部高台外面に及ぶ。貫入は、体部中位以下は目が粗く、口縁部は目が細かい。底部内外面に不純物が付着する。約3/5残存。60は口径16.9cm、底径4.6cm、器高7.25cm。高台はやや低めで、底部内面は中心部がやや丸くくぼむ。体部下位は若干腰が張る。口縁部は体部上位で内湾し、口縁端部は平らに仕上げる。体部中位の器内は薄いが口縁部は厚い。内面見込みに沈線による圏線、花文、点描文の一部が施されている。文様の表出は、花文の一部は全体的にはっきりしている。上位の圏線は、掘り込みが浅いが幅広である。体部外面の櫛目文は、ほぼ等間隔に4単位施されている可能性がある。密であるがたくて掘りが深い。釉薬は外面下位から高台際までかかる。貫入は、口縁部内外面は比較的目的が細かく、体部内面はヒビ状に入る。接合できないが、同一個体であると考えられる口縁部片がある。約1/3残存。61は復元口径15.95cm、底径5.3cm、器高6.4cm。底部内面と体部との境の段は浅く、底部内面の中央部は若干丸くくぼむ。内面見込みに沈線による圏線、花文、点描文、外面には櫛描文が施されている。文様の表出は、外面の櫛描文は比較的はっきりしているが、内面の文様は全体的に淡い。外面の櫛描文は残存部に5単位確認できる。釉薬は体部外面下位まで薄くかかり、底部内面には少量の混入物がある。約1/2残存。62は体部下位は腰が張る。底部内面と体部との境の段は浅く、底部内面の中央部は若干丸くくぼむ。内面見込みに花文、点描文、体部外面には櫛描文が施されている。体部外面の櫛描文ははっきりしている。体部外面の櫛描文は残存部に7単位確認できる。内面見込みの釉薬には少量混入物がある。釉薬は体部下位までかかる。約1/2残存。63は口縁部～体部片で、内面見込みに沈線による圏線、花文、点描文、体部外面には櫛描文が施されている。文様の表出は、外面の櫛描文ははっきりしている。外面の櫛描文は残存部に大きく4単位確認できる。釉薬は体部外面下位までかかり、口縁部内面には目の粗い貫入が入る。約1/4残存。



I-1b類

第41図 同安窯系青磁① (1/3)

64は口縁部の成形がやや粗く、一部輪花状になる。口縁端部はやや薄くつくる。内面見込みに沈線による圏線、花文、点描文、体部外面には櫛描文が施されている。文様の表出は、外面の櫛描文ははっきりしているが、内面の花文はやや不明瞭である。外面の櫛描文は残存部に大きく3単位確認できる。釉薬は体部外面下位まで薄くかかり、表面に気泡と混入物が少量ある。約1/4残存。65は口縁端部の成形はやや粗く、体部上位の屈曲部は器肉が薄い。内面見込みに沈線による圏線、花文、点描文、体部外面には櫛描文が施されている。外面の櫛描文は残存部で2単位確認でき、1本1本の間隔が広い。文様の表出は全体的にやや淡い。66は全体的に器肉が厚い。内面見込みに沈線による圏線、花文、点描文、外面には櫛描文が施されている。外面の櫛描文は残存部に等間隔で3単位確認できる。文様の表出は全体的にはっきりしている。口縁端部の釉薬は摺れて薄くなり、外面には少量の気泡がある。67は体部上位でゆるやかに内湾する。口縁端部は丸くつくる。器肉は全体的に厚い。内面見込みに沈線による圏線、花文、点描文、外面には櫛描文が施されている。外面の櫛目文は残存部に2単位認められる。文様の表出は文様の彫りが浅いため、不明瞭である。釉薬は厚くかかり、内外面に目の粗い貫入が入る。68は内面見込みに沈線による圏線、花文、点描文、外面には櫛描文が施されている。外面の櫛目文は残存部に2単位認められる。文様の表出は、内面ははっきりしているが、外面の櫛描文はやや淡い。器肉は体部上位の屈曲部分までは薄く、口縁部は厚手である。釉薬はやや厚くかかる。69は高台の平面形が楕円形で、畳付の幅は一定していない。底部内面は、段が深く中央が大きく盛り上がる。内面見込みに花文、点描文、外面には櫛描文が施されている。外面の櫛目文は細かく、残存部に2単位認められる。文様の表出は、釉薬が摺れて部分的に胎土が露出していることもあり、やや不明瞭である。釉薬は高台際近くまで薄くかかり、露胎部分には施釉前に施された櫛描文の先端が見える。内外面には目の粗い貫入が入る。70は高台の幅が一定ではないが、広く大きい。体部と底部内面の段が大きく、底部内面中央部はやや丸くぼむ。内面見込みに花文、点描文、外面に櫛描文が施されている。外面の櫛目文は残存部に6単位認められる。文様の表出は、内外面ははっきりしている。外面の櫛描文は彫りが深く、一部高台外面まで及ぶ。釉薬は、体部外面下位まで施釉する部分と、高台畳付まで施釉する部分がある。内面には目の細かい貫入が入る。約1/3残存。71は底部がやや薄く、内面に成形時の指ナデによる渦巻き痕が残る。内面見込みに花文、点描文、外面に櫛描文が施されている。外面の櫛目文は残存部に2単位認められる。文様の表出は、外面ははっきりしているが内面やや若干淡い。釉薬は体部外面下位までかかり、露胎部分には施釉前に施された櫛描文の先端が見える。釉薬の表面には微量の気泡と混入物があり、胎土には黒斑が少量含まれている。72は高台の幅が小さく、全体的に器肉も薄い。やや腰が張る。内面見込みに花文、点描文、外面に櫛描文が施されている。外面の櫛目文は残存部に2単位認められる。文様の表出は内外面ははっきりしている。釉薬は体部外面下位から高台外面までかかり、内外面には微量の気泡がある。露胎部分には施釉前に施された櫛描文の先端が見える。73は高台の幅は狭くなっている部分がある。内面見込みに花文、点描文、外面には櫛描文が施されている。外面の櫛目文は残存部に4単位認められる。文様の表出は内外面ははっきりしている。基本的に施釉範囲は体部外面下位までで、部分的に高台際まで施される。内外面は目の細かい貫入が入る。露胎部分には施釉前に施された櫛描文の先端が見える。底部内面には成形時の指ナデによる渦巻き痕が残る。74は高台内の削り出しが粗く、大きく段ができています。内面見込みに花文、点描文、外面には櫛描文が施されている。文様の表出はやや不明瞭である。内部に掛けられた釉薬の表面には目の細かい貫入が入る。体部外面は露胎。露胎部分には施釉前に施された櫛描文の先端が見える。内面に成形時の指ナデによる渦巻き痕が残る。

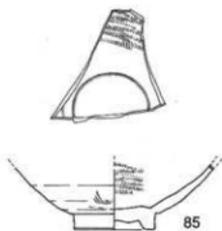
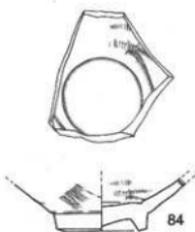
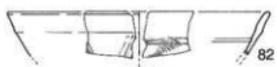
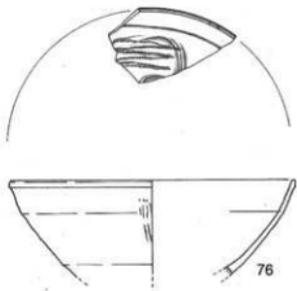
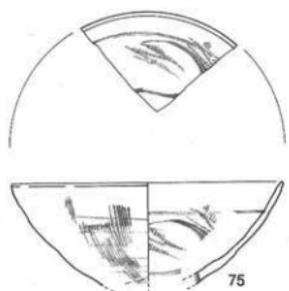


第42図 同安窯系青磁② (1/3)

I-1 c類 (第43図75~85) 外面に施された櫛目文がI-b類より粗いもの。75は体部上位でゆるやかに内湾する。内面見込みには沈線による圏線、花文、点描文、外面には櫛描文が施されている。外面の櫛描文は残存部に3単位確認できる。表面の凹凸で櫛描文がかすれている部分があり、全体的に文様の影りが浅く、不明瞭である。釉薬は部分的に薄くムラがあり、内外面に目の粗い貫入が入る。体部外面下位までやや厚く施釉され、露胎部分には施釉前に施された櫛描文の先端が見える。

76は体部上位でゆるやかに内湾する。内面見込みには沈線による圏線、花文、点描文、外面には櫛描文が施されている。外面の櫛描文は残存部に1単位の櫛描文が認められ、間隔を開けて施されていたと考えられる。文様は全体的にはっきりしている。釉薬は体部外面下位までかけられ、内外面少量の気泡がある。77は体部上位でゆるやかに内湾する。内面見込みには沈線による圏線、花文、点描文、外面には櫛描文が施されている。外面の櫛描文は残存部に3~4単位の櫛描文が認められる。文様は、花文がやや不明瞭である。口唇部内面は強いヨコナデでやや薄手につくる。釉薬は体部外面下位までかかっていたと考えられる。78は体部上位でゆるやかに内湾する。器内はほぼ一定。内面見込みには沈線による圏線、花文、点描文、外面には櫛描文が施されている。外面の櫛描文は残存部に2単位の櫛描文が認められる。文様は、全体的にやや不明瞭である。釉薬は薄く均一にかけられ、表面は口縁端部や体部が部分的に摺れて薄くなっている。微量の気泡がある。79は体部上位で内湾した後、指ナデ調整により若干反している。口縁部の器内が体部より厚い。内面には沈線による圏線と、花文の一部と思われる文様、外面には櫛描文が施されている。文様の影りが浅く不明瞭である。釉薬はやや厚くかけられ、内外面に目の粗い貫入が入る。80は口唇部内面を外側に引き上げ、口縁端部を薄くつくる。内面には沈線による圏線と、花文の一部と思われる文様、外面には櫛描文が施されている。文様の影りが浅く不明瞭である。釉薬は薄く均一にかけられ、内外面に目の粗い貫入が入る。81は体部上位で内湾し、口縁端部はさらに内側へ内湾する。口縁部外面下半を横方向に指ナデすることにより、口縁端部はわずかに玉縁状になる。内面には沈線による圏線と、花文の一部と思われる文様、体部外面には櫛描文が施され、文様の影りが深くはっきりしている。釉薬は薄く均一にかけられている。82は内面には沈線による圏線と、花文の一部と思われる文様、外面には2単位の櫛描文が施されている。内面の文様ははっきりしているが、体部外面の櫛描文はやや不明瞭である。釉薬は薄く均一にかけられている。口縁部の器内は厚いが、体部は薄い。83は体部上位でゆるやかに内湾する。内面に沈線が2条めぐり、その間も浅い溝状になっている。外面の櫛描文は影りが浅く薄い。釉薬は薄く均一にかけられている。84は高台が丁寧に成形されており、体部と底部内面の境にある段が大きい。内面には花文の一部と思われる文様、点描文、外面には櫛描文が施されている。文様は全体的にはっきりしている。外面の櫛描文は上から下に向かって、ナナメに施される。残存部には3単位認められる。釉薬は体部外面下位まで薄く均一にかけられ、露胎部分には施釉前に施された櫛描文が見える。内面に成形時の指ナデによる渦巻き痕が残る。85は底部外面と高台畳付の成形が粗く、畳付の幅も一定ではない。底部は薄い。体部と底部内面の境にある段は大きい。内面には点描文と花文の一部と思われる文様、外面の櫛描文はナナメに2単位施される。若干厚めの釉薬は体部外面下位までかかる。

I類 (第43図86) 小片のため細分できなかったもの。86は底部のみ残存し、口縁部~体部は欠損している。底部内面には成形時にできた指ナデ調整痕が明瞭に残る。高台の削り出しは丁寧である。外面は露胎のため、釉薬は体部外面下位までかけられていたと考えられる。高台内面の釉薬には目の細かい貫入が入る。



I-1c類



I類



第43図 同安窯系青磁③ (1/3)

Ⅱ類か (第44図87~89)

内外面無文で底部がⅠ類より肉厚。体部上位で内湾したあと口縁部をわずかに外反させるもの。

87は復元口径16.3cm、底径5.5cm。器高6.85~6.88cm。内面上位には沈線による圏線がめぐるが、左から右方向へ細くなっている。底部内面には成形時の指ナデによるうず巻き痕跡が残る。高台の削り出しはやや粗い。釉薬には内面見込みに目の粗い貫入が入る。施釉範囲は体部外面上位までと、狭い。約2/3残存。88は底部の断面形と器肉の厚さから、Ⅱ類であると考えられる。底部内面には成形時の指ナデによるうず巻き痕跡が残る。釉薬は体部外面下位までかかり、底部内面には目の細かい貫入が入る。89は底部内面に成形時の指ナデによるうず巻き痕跡が残る。外面は露胎である。釉薬には多量の混入物と目の粗い貫入が入る。

Ⅲ類 (第44図90~99)

形態はⅡ類と同じだが、体部外面には縦方向の幅が広い櫛目文を施すもの。

Ⅲ-1 a類 (第44図90) 内面無文のもの。90は復元口径16.15cm、底径5.15cm、器高7.42cm。高台の削り出しは粗く、底部は厚い。底部内面には成形時の指ナデによるうず巻き痕跡が残る。体部内面上位には沈線による圏線が2条めぐる。体部外面の櫛目文は口縁部付近から縦に、体部中位から下位まで3本単位で施されている。釉薬は体部外面中位までかけられ、内外面には目の粗い貫入が入る。約1/2残存。

Ⅲ-1 b類 (第44図91) 外面に縦方向で幅広の櫛目文を施し、櫛状の施文具を用いるもの。91は口縁部が外反する。体部内面上位には沈線による圏線がめぐり、釉薬がかかる。

Ⅲ-1 b c類 (第44図92~93) 破片であるため櫛状施文具かヘラ状施文具か、使用された種類が確認できないもの。92は口縁部がやや外反する。内面には櫛状の施文具で施された文様が確認できる。沈線による圏線が施されているが、ヘラ状の施文具による花文であるかは不明である。釉薬には目の粗い貫入が入る。93は底部が厚く、体部と底部内面の境には段がある。体部内面にヘラ状の施文具による花文であると考えられる文様を施す。体部のほとんどを欠損しているため櫛状の施文具が使用されていたかは不明である。残存部からは外面に櫛目文は認められない。内面には目の粗い貫入が入った釉薬がかかり、外面は露胎である。胎土に空洞が目立つ。底部の厚さと断面形がⅢ類に類似する。

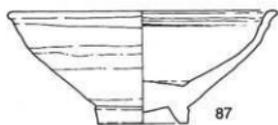
Ⅲ-1 c類 (第44図94~98) 櫛状の施文具とヘラ状の施文具で花文を施しているもの。94は復元口径17.5cm、底径5.1cm、器高6.85cm。底部の削り出しが深いため、底部は薄い。3単位認められる外面の櫛描文のうち、2単位は7本ずつ施される。釉薬は体部外面下位から高台までかかり、目の細かい貫入が入る。約1/3残存。95は体部外面の櫛描文はまばらに2単位施されている。施釉範囲は体部下位までで、目の粗い貫入が入る。口縁部は外反しないが外面の櫛描文の特徴により分類した。96は体部上位をやや内湾→外反する。内面には目の粗い貫入が入る。97は口縁部はやや大きく屈折する。内面にはヘラ状の施文具による花文が施されており、櫛状の施文具も使用されたと考えられる。98は口縁部はわずかに外反する。内面の圏線は途中で途切れている。

Ⅲ類 (第44図99) 小片で細分できないもの。99は高台の形状はⅢ類と類似するが、底部はかなり薄い。内面見込みに沈線による圏線が施されている。釉薬が体部外面下位までかかる。

小碗 (第44図100)

Ⅰ類 (第44図100) 高台の特徴は同安窯系、体部の形は龍泉窯系の特徴を持つもの。

100は底部内面には体部との境の段以外に薄い圏線が認められる。施釉範囲は体部外面下位までである。釉調は青磁だが、断面形は白磁に類似する。



87

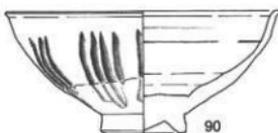


88



89

Ⅱ類か



90

Ⅲ-1a類

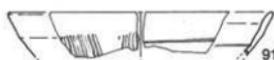


92



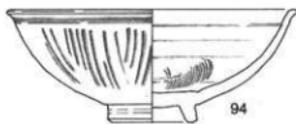
93

Ⅱ-1b類かc類

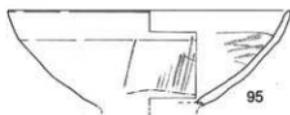


91

Ⅲ-1b類



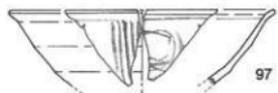
94



95



96

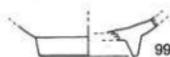


97



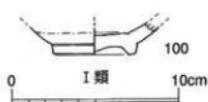
98

Ⅱ-1c類



99

Ⅲ類

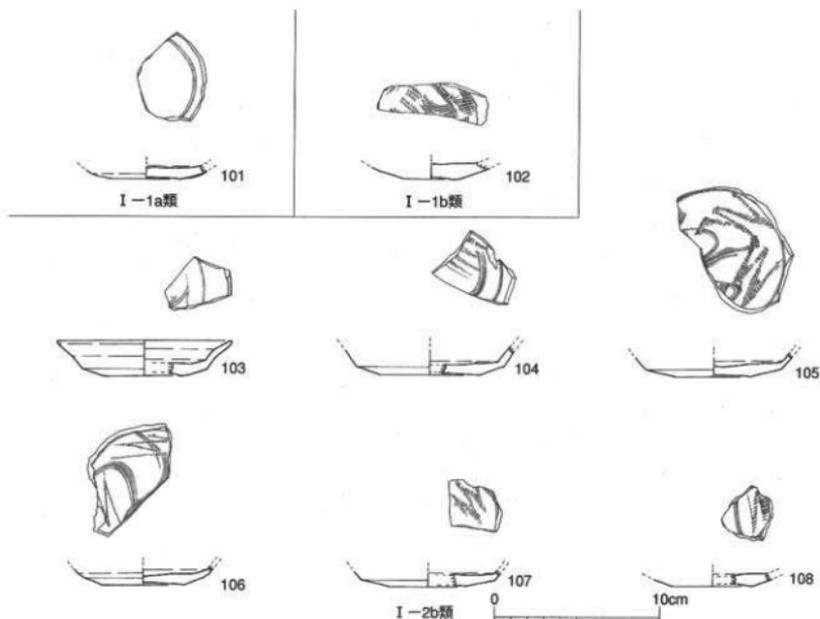


100

I類

10cm

第44図 同安窯系青磁④ (1/3)



第45図 同安窯系青磁⑤(1/3)

皿(第45図)

I類(第45図101~108) 体部中位で外側へ屈曲し、その内側は段になる。尖り気味で薄い口縁部。

I-1 a類(第45図101) 101は内面見込みに二重圏線を施し、体部外面下位以下は露胎である。

I-1 b類(第45図102) 102は内面に花文と櫛描文様を施し、体部外面下位以下は露胎である。

I-2 b類(第45図103~108) 全面施釉の後、底部の軸を掻き取り、内面に花文と櫛描文を施す。

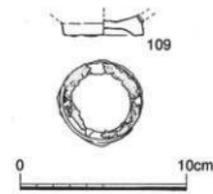
103は復元口径10.55cm、復元底径4.2cm、器高2.15cm。釉薬には目の粗い貫入が入る。104の底部は正円ではなくやや楕円形である。目の細かい貫入が入る。105は底部に回転糸切り痕跡が残る。約1/3残存。106は体部外面が一部露胎である。約1/2残存。107は内面見込みに櫛描文が施される。108は小片だが内面見込みに花文と櫛描文が施される。(大野)

一初期高麗青磁一(第46図)

碗

I-2 類(第46図) 環状高台で削り出しが浅く全面施釉。

109は高台が外側に張り出し高台内面は斜めである。底部内面は小さく一段くぼむが、底部内外面は粘土紐巻き上げ痕跡で中央がやや盛り上がる。底部の器内は薄い。高台畳付には目跡が4ヶ所に付着している。内面無文。内外面に貫入が入った釉薬に混入物をやや多く含み、薄く施される。釉薬が残存部すべてに施釉されていることから、全面施釉であると考えられる。(大野)



第46図 高麗青磁(1/3)

一白磁— (第47図～第52図)

輸入陶磁器のうち、図化できた白磁だけでも計162点と大量に出土している。碗Ⅳ類の出土が一番多く、Ⅴ類、Ⅵ類と続く。

碗 (第47図110～第51図258)

Ⅱ類 (第47図110・111)

削り出しが浅く高台内面はわずかにふくらませた状態で斜めに削る。体部外面下半は露胎。

Ⅱ-1類 (第47図110)

内面見込みに段がないもの。110は底部が小ぶりで底部外面は平坦。器肉が厚く、外面は露胎。

Ⅱ類 (第47図111) 小片で詳細が不明なもの。111は110よりやや高台の削り出しが深く、底部内面はほぼ平坦、器肉は全体的に厚い。外面は露胎である。

Ⅳ類 (第47図112～第49図198)

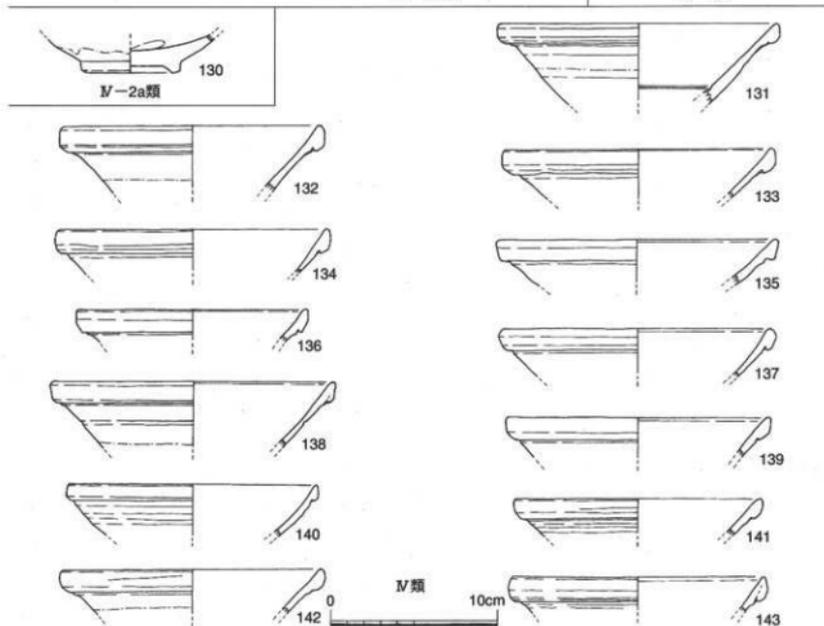
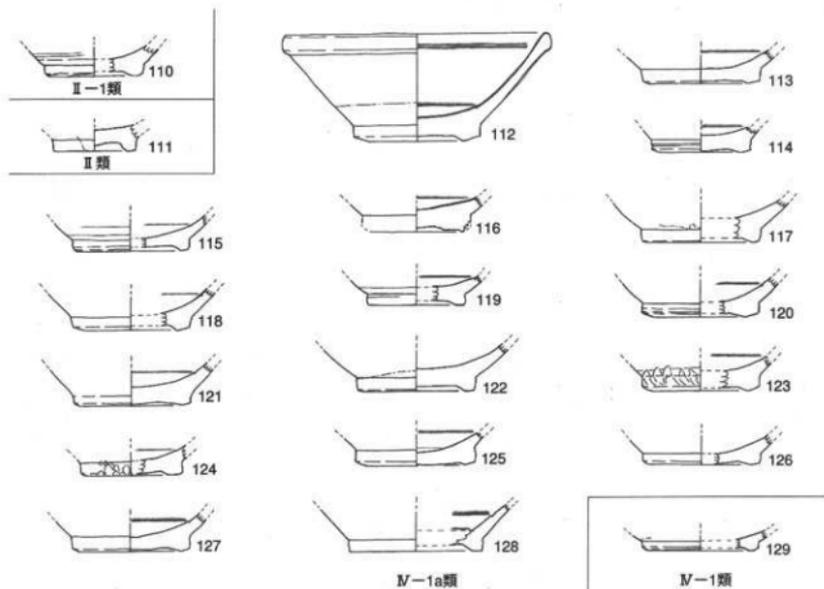
Ⅱ類に比べて口縁部の玉縁は肉厚、高台は幅広で削り出しが浅く底部の器肉は厚い。底部内面はくぼむものが大半で外面は平坦である。施釉範囲は体部外面下半までである。

Ⅳ-1 a類 (第47図112～128) 高台の内面を斜めに削り肉厚の底部を持つ。内面見込みに沈線があるか、沈線・段がなく平滑なもの。112は復元口径16.2cm、復元底径7.6cm、器高6.55cm。口縁部の玉縁は大ぶりで、器肉は全体的に厚い。灰白色の釉薬は体部下位までやや厚くかかり気泡がある。口縁部内面に浅い沈線の二重圏線、底部内面に深い沈線の圏線がめぐる。同一個体の口縁部片を含めて約1/2残存。113～115、117～121、125は内面見込みに沈線による圏線がめぐる。114は内面見込みの沈線が深く掘り込まれる。115は内面見込みに浅い沈線。116は内面見込みの破損部先端に圏線の痕跡が残る。内面に不純物を含んだ釉薬がかかる。121～124は体部外面から高台にかけてヘラケズリ痕跡が残る。121は底部の削り出しがとて浅く、内面見込みに沈線による圏線がめぐる。122は釉薬が高台付近までかかり、内面見込みの釉薬には不純物、外面の釉薬には気泡がある。123は内面見込みに沈線による圏線の痕跡が残る。釉薬に細かい貫入や気泡が入る。124は内面見込みに浅い段につき、内面釉薬に貫入が入る。125は高台の削り出しがとて浅い。126は内面釉薬に若干不純物が混じる。127は内面に細かい気泡の入った釉薬がかかる。128は体部内面下半と、体部と内面見込みの境目に、幅の広い沈線がめぐり浅い段ができています。内面見込みに貫入の入った釉薬がかかる。大ぶりの復元底径、内面にめぐる2条の沈線、平坦な内面見込みは、Ⅳ-1 a類112～127と様相が異なっている。

Ⅳ-1類 (第47図129) 高台の削り出しが浅く内面見込みに沈線や段があるか不明なもの。129は貫入の入った釉薬が高台付近までかかる。

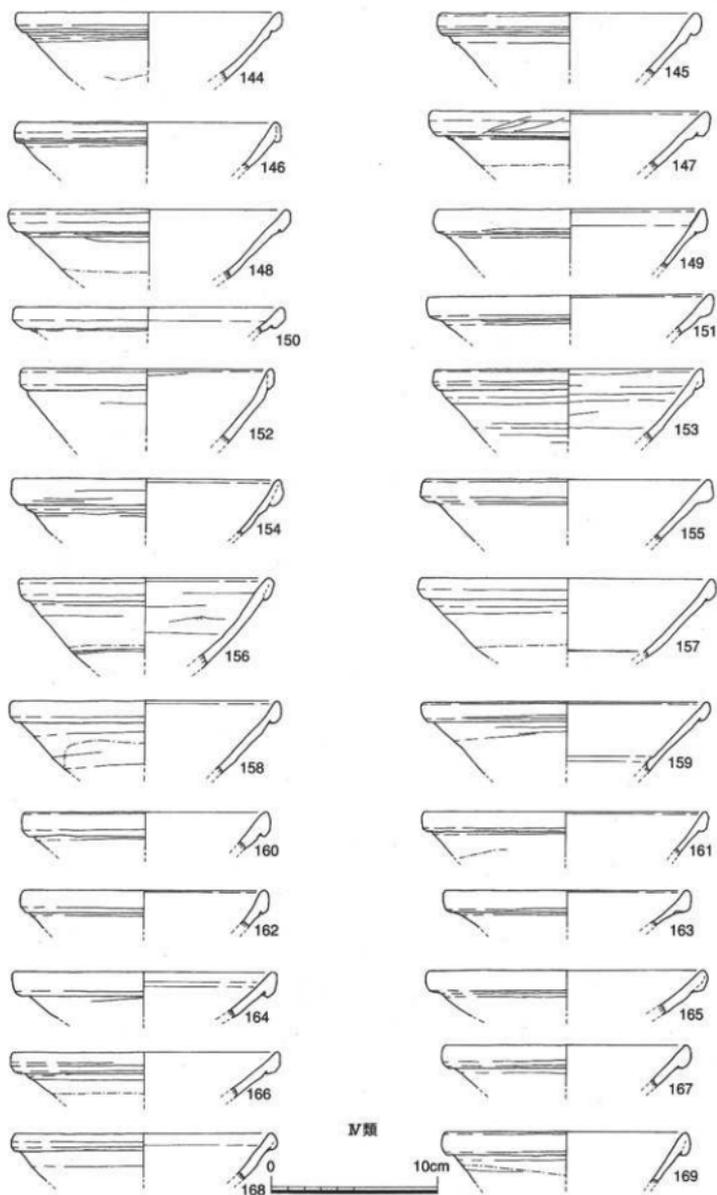
Ⅳ-2 a類 (第47図130) 130は高台の削り出しはⅣ-1 a類より深く、釉薬は体部下位までである。

Ⅳ類 (第47図131～第49図198) 小片で細分できないもの。131～139、141～182は大ぶりで肉厚な玉縁をもち、玉縁と体部外面の境は明瞭である。131は内面下位に深い沈線による圏線、体部外面玉縁の下に段がある。釉薬は体部上位までで少量の気泡がある。132は体部外面玉縁の下に段がある。釉薬は体部上半までで表面貫入と少量の気泡がある。133～135・137・139～141は釉薬が内外面にかかり微量の気泡がある。135は体部外面玉縁の下に段がある。136は体部外面玉縁の下に段がある。釉薬が内外面にかかり少量の気泡がある。138は幅の広い沈線が体部外面上位にある。釉薬は体部上半までで、少量の気泡がある。140の玉縁は小ぶりである。142は体部外面玉縁の下に段がある。釉薬が上位までかかり外面には微量の気泡がある。143は体部外面玉縁の下に段がある。釉薬の外面には微量の気泡があり、内面には黒色粒子が含まれる。



第47圖 白磁① (1/3)

144は玉縁の器肉がやや薄いものの、大ぶりで丸みをもつ。体部外面玉縁の少し下に段がある。軸葉が体部中位までかかる。体部には均一にかかるが、口縁部外面はやや厚く液垂れをしている。内面には微量、外面には少量の細かい気泡がある。145は全体的に器肉は厚い。玉縁は大ぶりで丸みもち、胎土を折り曲げて成形している痕跡が断面に確認できる。体部外面玉縁の少し下に段がある。軸葉は内外面に均一にかかる。外面の軸葉には多量の気泡、内外面上位には目の粗い貫入が入る。146は玉縁の下位に明瞭な稜がある。体部外面玉縁のすぐ下に段がある。体部上位の器肉が厚い。玉縁成形時の痕跡が断面に認められる。軸葉が内外面に薄く均一にかかり、細かい貫入が入る。外面には細かい多量の気泡があり、ざらざらした感触である。147は玉縁の下位に明瞭な稜がある。体部外面玉縁のすぐ下に段があり、底部方向に器肉が薄くなる。軸葉は薄く均一に体部上位までかかる。外面には多量の気泡、内外面に目の粗い貫入が入る。148は玉縁が大ぶりで肉厚は薄い。玉縁中位に稜があり、成形時の痕跡が断面に認められる。体部外面玉縁のすぐ下に段があり、体部中位の器肉が薄くなっている。軸葉はやや厚く体部上位までかかり、外面には多量の気泡、内外面には目の粗い貫入が入る。149は玉縁が大ぶりで肉厚、玉縁下位に稜がある。体部外面玉縁のすぐ下に段があり、底部方向に器肉が薄くなっていく。軸葉が内外面にやや厚くかかり、口縁部内面は液垂れしている。内外面には細かい貫入、外面には少量の気泡がある。150は丸みをおびた玉縁の少し下に段がある。内面には浅い沈泡による圏線がめぐる。内外面に軸葉が均一にかかる。151は玉縁下位に稜、体部外面玉縁の下に若干段がある。器肉が厚く、軸葉は内外面に薄く均一にかかる。外面には微量の気泡があり、内面には黒色粒子が含まれる。152は玉縁の器肉がやや薄い。内外面にかかる軸葉には気泡と凹凸があり、露胎の部分が目立つ。外面の気泡は多量である。体部の傾斜はやや緩やかである。153は玉縁の器肉は薄く、断面が三角になっている。体部外面玉縁の少し下に段があり、体部の器肉が若干薄めで、軸葉は体部中位までかかる。部分的に大きな貫入、外面には多量の気泡や凹凸がある。体部の傾斜はやや緩やかである。154は玉縁が肉厚で成形時の痕跡が明瞭に残る。体部外面玉縁の少し下に段があり、体部の器肉は薄い。軸葉が内外面にかかり少量の気泡がある。体部の傾斜はやや緩やかである。155は玉縁が断面三角を呈し、厚くなっている。玉縁付近の軸葉は液垂れしている。内外面少量の気泡、細かい貫入が入る。156は玉縁の下位に稜、玉縁の少し下に段がある。内面下位には沈線の一部が見受けられることから圏線が巡っていたか。軸葉は体部下位までかかり、表面は凹凸と多量の気泡がある。157は玉縁はやや器肉が薄い。内面下位には沈線の一部が見受けられることから圏線が巡っていたか。軸葉は薄く、体部上位までかかり少量の気泡がある。器肉は薄い。158は玉縁が丸みをおび、体部の器肉は厚い。軸葉は体部上位までと施軸範囲が狭く、内面はなめらかで微量の気泡、外面は若干の凹凸と少量の気泡がある。159は玉縁がやや薄めで丸みをおび、内面下位にはゆるやかな段がある。軸葉は内外面にかかり少量の気泡と若干の凹凸がある。器肉は厚い。160は玉縁下位に稜、体部外面玉縁の少し下に段がある。口縁部、体部が厚く、口縁部の一部には玉縁成形時にできた穴が残り、玉縁の成形方法が窺える。軸葉は内外面に均一にかけられ、微量の気泡がある。161は全体的に器肉が薄い。軸葉は体部上位までかかり微量の気泡がある。162は全体的に肉厚である。軸葉はやや厚く施軸され、内外面にかかり微量の気泡、貫入が入る。163は口縁部は断面三角で肉厚である。軸葉はやや厚く内外面にかかり微量の気泡がある。164は全体的に肉厚で、玉縁は丸みをおびる。軸葉は内外面に均一にかけられている。165は玉縁下位に明瞭な稜があり、全体的に肉厚である。軸葉は内外面に均一にかかり微量の気泡がある。166は玉縁が丸みもち、軸葉は体部上位までで少量の気泡がある。167は玉縁下位に稜と、内外面微量の気泡がある。168の玉縁はやや小ぶりで丸みをおび、全体的に器肉が厚い。169は玉縁の成形が粗い。軸葉は体部上位までかかる。



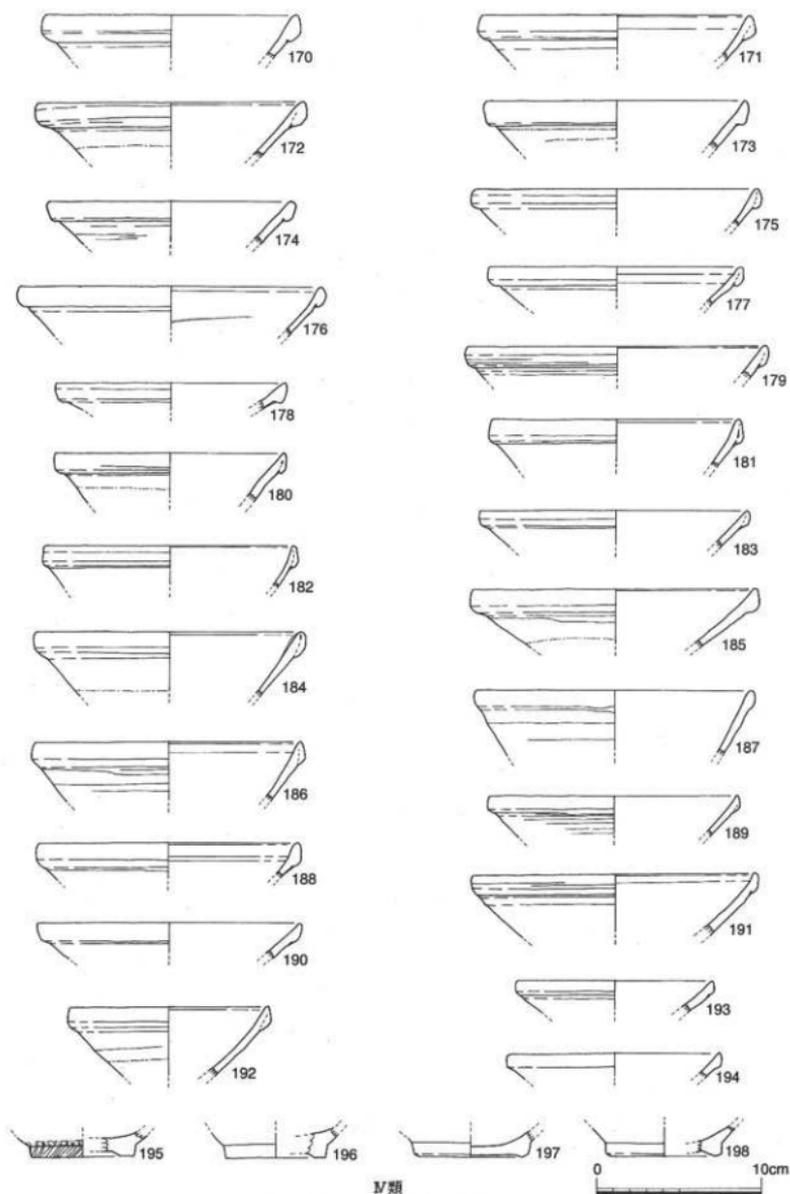
第48圖 白磁② (1/3)

170は全体的に肉厚で、玉縁は丸みをおびる。内外面に釉薬がやや厚く均一にかかり、表面には微量の気泡がある。171は玉縁の断面が三角で、下位に稜がある。釉薬は内面に液垂れがあるが他は均一にかかり、内外面には微量の気泡がある。172は玉縁が肉厚で丸みをおび、やや下に小さい段がある。釉薬は体部上位まで厚く均一にかかり、表面には微量の気泡がある。173は玉縁の下に沈線による縦線がめぐる。玉縁は下位で内側に屈曲し、断面は縦長の三角を呈す。釉薬は体部上位まで均一にかかるが、玉縁上位で液垂れしている。表面には微量の気泡がある。丁寧なつくりである。

174からは玉縁がやや小型化してくる。174は玉縁がやや小ぶりであるが肉厚で丸みをおび、体部の器肉も厚めである。内外面に薄く釉薬がかかり少量の気泡がある。175はやや小ぶりな肉厚の玉縁をもつ。体部下位に稜があるが丸みをおびる。内外面にやや厚い釉薬が均等にかかり、少量の気泡、貫入が入る。176は若干玉縁が薄手で、丸みをおびている。玉縁の下には若干段がある。内外面にやや厚めの釉薬が均一にかかり微量の気泡がある。177は肉厚であるがやや小型で丸みをおびた玉縁をもつ。玉縁の下はやや段になっている。内外面にかかる釉薬は薄いが、玉縁の部分は液垂れしている。微量の気泡、細かい貫入がある。178は玉縁は丸みをおび、体部外面に段はない。全体的に器肉は厚い。内外面に混入物混じりの釉薬がかかる。外面にかかる釉薬は液垂れしている。179は玉縁の器肉は薄いが、体部は厚い。丸みを帯びた玉縁の下に2条の沈線がある。薄くかけられた釉薬には微量の気泡と目の粗い貫入が入る。180は玉縁下位に稜があるが、扁平気味である。釉薬は薄く体部上位までかけられ、微量の気泡がある。玉縁を成形した痕跡が断面に残る。181は口縁部の玉縁は丸みをおび肉厚であるが、やや薄めで扁平気味である。釉薬の厚さはムラがあり、微量の気泡がある。182は玉縁の上半に浅い沈線があるが扁平気味。器肉は薄手である。体部外面と口縁部内外面は厚く、体部内面は薄く施釉される。内外面中位以下には微量の気泡と目の粗い貫入が入る。

183～194は玉縁が小型化もしくは、外面の玉縁と体部との境が不明瞭なものである。183は玉縁が小ぶりだが肉厚で丸みをおびる。体部の器肉は薄めである。体部外面には厚く、他は薄く施釉される。184は丸みをおび大ぶりで肉厚な玉縁で、外面の玉縁と体部との境が不明瞭である。釉薬は体部上位まで、口縁部に厚くかかる。内外面には少量の気泡と目の粗い貫入が入る。185は丸みをおび大ぶりで肉厚な玉縁で、外面の玉縁と体部との境が不明瞭である。釉薬は薄く体部上位までかかり外面に気泡がある。186は断面三角の玉縁で肉厚。外面は玉縁上位にはっきりとした稜があり、外面は直線状になる。やや厚くかけられた釉薬には微量の気泡がある。187の玉縁は小ぶりで、断面は楕円形で丸みをおびる。釉薬はやや厚く微量の気泡がある。188の玉縁は大ぶりで肉厚、丸みをおびる。釉薬には微量の気泡がある。189は玉縁が小ぶりで肉薄、外面の玉縁と体部との境が不明瞭である。薄くかかる釉薬には微量の気泡がある。190は玉縁が小ぶりで肉薄、体部外面にはヘラミガキによる斜位の沈線がある。釉薬がやや厚くかかる。191は玉縁が小ぶりで肉薄。玉縁の上半には浅い沈線がある。やや厚い釉薬がかかり、少量の気泡が外面にある。192は玉縁が断面三角でやや肉厚、外面の玉縁と体部との境が不明瞭である。釉薬は体部上位まで薄くかかり少量の気泡がある。193は玉縁が小ぶりで内外面にはやや厚く釉薬がかかる。194は玉縁が小ぶりで断面三角を呈する。釉薬はやや厚くかかり微量の気泡がある。

195～198は底部片である。高台の削り出しが浅く、底部は肉厚で底部外面は平坦である。195は外面の体部から高台にかけてヘラケズリ痕跡が残る。やや厚い釉薬は体部下位までかかり内面には細かい貫入が入る。196は底部は肉厚で内面には薄い釉薬がかかる。外面は露胎。197は底部は薄く丸くくぼむ。内面には薄い釉薬がかかり細かい貫入が入る。外面は露胎。198は高台の削り出しがやや深く、底部が薄い。内面には厚い釉薬がかかり細かい貫入が入る。外面は露胎。



M類
 第49圖 白磁① (1/3)

V類 (第50図199~225)

細く高い直立高台で高台壘付は平坦、体部下位に丸みを持ち、内面見込みは丸くくぼむ。口縁部は直口縁と外反の2者がある。釉薬には混入物が目立つ。

V-1類 (第50図199) 直口縁をなすもの。199は口縁部薄く、内面は圏線がめぐり、釉薬は厚い。

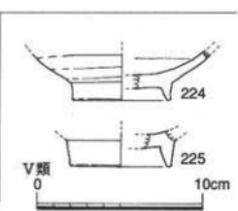
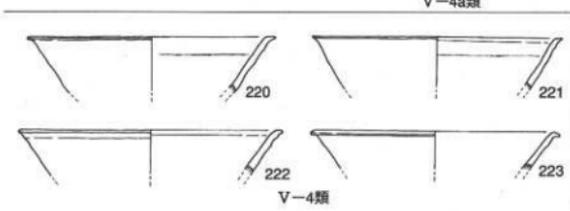
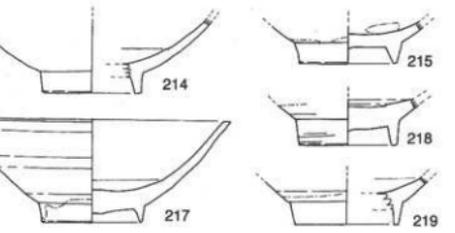
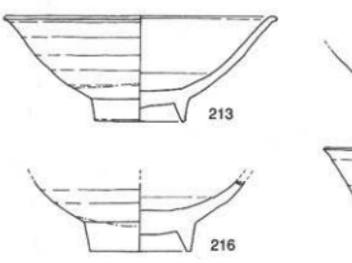
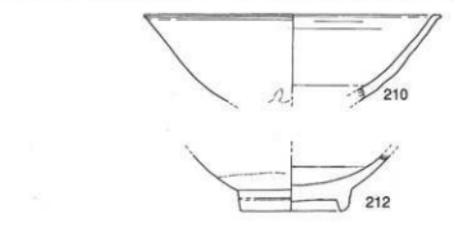
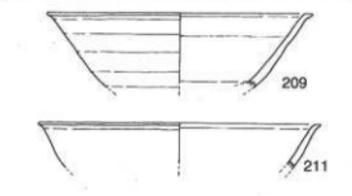
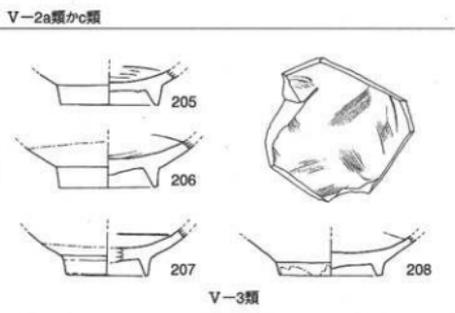
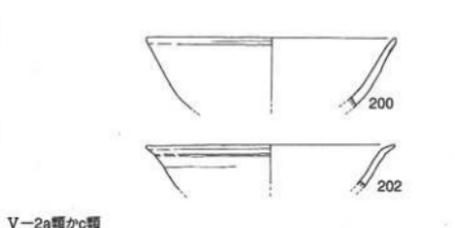
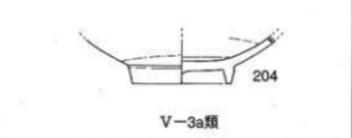
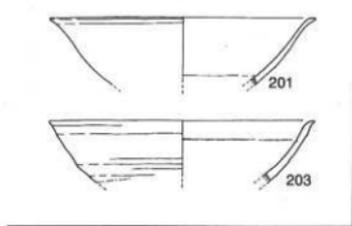
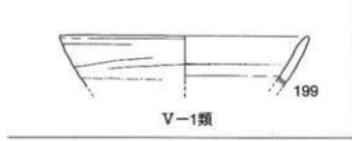
V-2 a c類 (第50図200~203) 口縁部が外反し、細分できないもの。200は口縁部の器肉がやや厚い。釉薬は厚く少量の気泡、貫入が入る。201は内面下位にわずかな段がある。やや厚い釉薬には少量の気泡がある。202は口端部がやや長めで、外面の屈折部は沈線がある。釉薬がかかり微量の気泡がある。203は口縁部のつくりが粗く内面は圏線がめぐり、厚く黒色粒子を多く含んだ明オリブ灰色の釉薬が体部下位までかかり微量の気泡がある。内外面には黒色粒子が多量に、外面には黒褐色の斑点が少量含まれている。このような特徴はⅧ-1類の「朝鮮産粗製白磁」243と類似する。

V-3 a類 (第50図204) 内外面無文で、端部を玉縁風に仕上げた口縁部がつく。204は底部外面は平坦で内面は丸くくぼむ。底部は薄く、釉薬は体部下位までかかる。

V-3類 (第50図205~208) 高台が細く高く、底部外面がほぼ平坦。文様の有無不明なもの。高台の断面形で分類した。205は内面見込みに同心円状の沈線と微量の気泡がある。206は内面見込みに圏線、体部外面下位まで施釉。207は内面見込みに圏線、釉薬は体部外面下位までで細かい貫入が入る。208は内面見込みにハケメ状の暗文がある。体部下位~高台外面まで釉薬が厚くかかり、少量の気泡、細かい貫入が入る。

V-4 a類 (第50図209~219) 口縁部は外側に屈折し、上端部は水平にする。体部は下位に丸みを持つ。209は内面上位と下位に圏線、外面に多量の気泡がある。210は見込み内面に段があり釉薬は体部下位まで厚くかかり、口縁部付近は液垂れをしている。目の粗い貫入と多量の気泡がある。211は内外面には釉薬がかかり少量の気泡と細かい貫入がある。212~218は底部外面が平坦で、内面見込みは丸くくぼみ圏線がある。212は釉薬は体部外面下位までで微量の気泡がある。213は復元口径16cm、復元底径6cm、器高6.4cm。釉薬は体部外面下位まで薄くかかり、微量の気泡と部分的に貫入がある。約1/2残存。214は釉薬は体部外面下位までで少量の気泡がある。215は体部外面にはヘラケズリ痕跡が残る。釉薬は体部外面下位までで少量の気泡がある。216は内面見込みに深い沈線がある。その内側が段になり、丸くくぼむ。器肉は全体的に厚く底部の重心が重い。釉薬は体部外面下位までで一部は高台まで及び、表面には少量の気泡がある。217~219は灰白色の化粧土がかかる。217は復元口径15.7cm、復元底径6.05cm、器高6.4cm。高台は低く底部は厚い。高台壘付は細く尖る。体部内面と内面見込みに圏線がある。体部外面中位から下位に化粧土、釉薬は体部外面中位~高台までかかる。少量の気泡、目の粗い貫入が入る。約1/2残存。218は内面見込みに圏線があり、その内側は輪状に浅い段になる。底部は厚い。内外面施釉前に化粧土を高台外面までかける。内面見込み中央にある段の輪郭に沿って化粧土の色が薄く見える。釉薬は体部下位まで、内面見込みに微量の気泡と貫入が入る。219は体部外面下位と高台の一部に化粧土がかかる。釉薬は体部下位までで少量の気泡がある。V-4類 (第50図220~223) 口縁部片で傾斜がゆるやかなもの。220は内面見込みに圏線がめぐり、微量の気泡、貫入が入る。221は微量の気泡がある。222は内面見込みに圏線があり微量の気泡と貫入が入る。223は口縁部付近が液垂れする。微量の気泡と貫入が入る。

V類 (第50図224~225) 細分できないもの。224は高台は低い。底部外面は平坦で内面見込みは丸くくぼみ圏線がある。釉薬は体部下位までで微量の気泡がある。225は底部外面平坦である。内面見込みはややくぼむ。



第50図 白磁④ (1/3)

Ⅴ類 (第51図226～231)

口径が小さい12～14cm程度の中型碗である。体部は内湾気味に傾斜し浅形を呈する。

Ⅴ-1 a類 (第51図226) 226は直口径で内外面無文。微量の気泡がある。

Ⅴ-1 類 (第51図227) 227は口径部がやや外反し、外面に圏線、微量の気泡がある。

Ⅴ-2 a類 (第51図228～231) V-4類と同様の口径部で内外面無文。228は内面見込み上位に圏線、気泡と目の粗い貫入が入る。229は内面見込み上位に圏線、釉薬には微量の気泡がある。230は釉薬が外面にかかり、微量の気泡がある。231は釉薬に微量の気泡がある。

Ⅵ類 (第51図232・233)

口径部は長めに外反し体部は傾斜気味。見込み内面は沈線がめぐり体部の立ち上がりは段になる。

232は内面上位に圏線、釉薬には少量の気泡と貫入がある。233は高台の削り出しは浅く逆台形状。底部は平坦で厚い。内面見込みは無文。釉薬は基本的に高台際までかかり、表面には微量の気泡がある。

Ⅶ類 (第51図234～250)

内面見込みの軸を環状に掻き取るもの。見込みの段の有無と口径部の形態で細分できる。

Ⅶ-1 類 (第51図234～247) 口径部はV-4類と同一、体部は斜上方に直線的に開く。内面見込みに段はつかない。産地は中国と朝鮮の2ヶ所確認でき、両者の内面見込みや高台畳付に高台重ね焼き時の化粧土が付着する。化粧土は灰白色が主だが、有色の色化粧土も確認できる。内面見込みの化粧土の径は高台径とほぼ等しく若干くぼみ、高台畳付の化粧土も同様の色調をしている。このことから、高台重ね焼きを行ったことが分かる。

中国産 (第51図234～239)

234～236は内面見込みの軸掻き取り部分と、高台畳付もしくはその周辺に灰白色の化粧土を有するもの。見込みに環状に残っている。234は復元口径15.9cm、底径6.8cm、器高5.55cm。約1/3残存する。高台は逆台形状、底部外面はほぼ平坦。内面見込みは丸くくぼみ、圏線がめぐる。釉薬はほぼ高台際までかかり微量の気泡がある。235は高台は逆台形状、底部は平坦である。体部下半にはヘラケズリ痕跡が残り、釉薬には貫入が入る。236は高台肉厚の逆台形状。外面にヘラケズリが残り、下半の露胎部は明褐色に発色する。釉薬には少量の気泡があり下位までかかる。237は内面見込みのみ化粧土を施す。高台は外反して低く、内面見込みはくぼむ。環状に残る化粧土は高台径に近く若干段になっている。釉薬は高台際までかかり微量の気泡がある。238は高台下半欠損で畳付の化粧土は不明。底部外面は平坦で、見込みはくぼむ。下位までの釉薬に少量の気泡がある。239は高台は細く高い逆台形状。底部外面は平坦で内面見込みは丸くくぼむ。見込みの軸掻き取り部分に化粧土状の付着物が環状に薄く残る。釉薬に少量の気泡と貫入があり高台際までかかる。

朝鮮産 (第51図240～247)

240～247は朝鮮産の粗製白磁であると考えられるものである。精良品の中国産に比べて全体的に粗雑なつくりで小型。釉薬のかけ方も範囲が狭く、釉薬に斑点や混入物が目立ち胎土も粗いものが多い。131～138は灰白色の化粧土と、有色の色化粧土がみられる。

240～244は内面見込みと高台畳付に化粧土を有するものである。240は高台は逆台形状。底部は平坦。釉薬は体部下位から高台までかかり貫入が入る。釉薬には褐色の斑点が少量みられる。241は高台は逆台形状、底部外面はほぼ平坦で内面見込みは丸くくぼむ。釉薬をかける前に灰白色の化粧土を内面と外面高台際までかけ、その上から灰オリーブ色の釉薬を体部下位までかけている。下にかける